灯火の鬼となる

零℃

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼を見たものはみな口をそろえて彼をこう呼ぶ

『鬼』と

目次

プロローグ
死の淵 1
底 6
真っ黒 11
回帰 19
一章　出会い
新地 24
邂逅 29
希望 34
家族 40
水面下 49
一幕 56
幕間 60
About me 66
帰還と変化 77
閑話休題〈1〉 81
躍動 89

プロローグ
死の淵

とある田舎、ある村の隅の孤児院、深夜だというのに赤ん坊を連れた女が一人
その赤ん坊を抱く腕に我が子であるという自覚はなく、どこか鬱陶しさを含んでいる
その女は孤児院の玄関をノックすると中から出てきた職員に押し付けるようにして赤ん坊を渡した。
そのしぐさはひどく一方的で職員も戸惑っていたが、不遇な赤ん坊のことを思って素直に受け取った
「あなたも可哀そうね・・・今の時代あんな人がいるから怖いのよ、大丈夫ですよ、あなたは私たちが責任と愛情をもって育てますからね」
そして柊（ひいらぎ）孤児院の院長である咲良琴音（さくらことね）は赤ん坊を愛おしそうに抱きかかえながら孤児院の中に入っていった

それから十年・・・
「優斗‼今日こそお前に勝ってやるからな‼」
「上等だ灯夜‼今日もアレは俺のもんだ‼」
それぞれ灯夜、優斗と呼び合う少年たちは活気よくお互いを見据えていた。
自分たちが手に入れたい最高のモノを求めて勝負をするために
「じゃあいくぞ！」
「「じゃ～んけん‼」」
その日勝ったのは連日続けて優斗だった。
「今日のおかわりゲット～くぅ～！やっぱり勝負で勝ち取った飯は美味いぜ」
「なんで勝てないかなぁ・・・ぼくだっておかわり欲しいのに・・・」
灯夜は机に伏せながら悔しそうに言った。
その瞳には心なしか涙が浮かんでいる、さすがに連日連敗では泣け

てくるのも納得がいく
「灯夜はわかりやすいんだよ、ていうかだいたい最初に出すのがチョキだし」
「ぼくってそんなにわかりやすいかなぁ・・・」
　夜ご飯の残り物であるカレーを賭けたじゃんけん対決は幕を閉じ、争奪戦のために最後まで残っていた二人以外誰もいなくなった孤児院の食堂で二人は口いっぱいにカレーをほおばる。
　子供に合わせた甘口で、それなのにどこかスパイシーでとても美味しい
　そんな絶品を味わっていると食堂に一つしかない扉から誰かが入ってきた
「あら、二人ともまだ残ってたの？もうすぐ入浴の時間ですよ？いっぱい食べてくれるのは嬉しいけど、ちょっと急ごうね？」
　優しい声色で灯夜たちに語り掛けてくる女性は院長だった。
　長い黒髪に美人な院長は誰からも好かれている、おそらくこの女性のおかげで灯夜は優しい性格になれたのだ。
「院長先生・・・また負けちゃった・・・」
「先生‼また灯夜に勝ったんだぜ‼これで五日連続だ‼」
　そんな二人を見つめる院長はどこか嬉しげで、実の子ではないにしろ、大きな愛情を持っていることがひしひしと伝わってくる。
「優斗くんはいつもすごいね、でもたまには灯夜君にも分けてあげてね？」
「わかってるよ、でも灯夜が嫌がるんだよ」
　院長はそうなの？と聞くと灯夜は言った
「勝負なんだから、負けたぼくがもらうのは、変、だと思う」
　院長は灯夜の意見を聞くとうんうんといった風に灯夜に言う
「灯夜くん、確かに勝負は大事よ？でもねそれ以上に思いやりが大事なの、みんながどんな時も相手のことを思っていれば、きっと勝ち負けより大事なものが見えてくるわ、それと、親切にしてくれる人を傷つけちゃだめよ、優斗君だって、灯夜君に食べてほしくていらないか聞いてるんだよ？だから親切にしてくれる人の好意を無下にしちゃ

だめなんだよ」
　灯夜にとって勝負は絶対で、負けたものは弱い、勝ったものは強い、そのくらいしか考えがなかった。
「ぼくは、それでもやだよ・・・強くなりたいもん・・・みんなを守れるくらい院長先生も、優斗も他のみんなも」
「そっか・・・じゃあ強くなってみんなを守ってね？ヒーローさん」
　院長は灯夜の頭にポンと手を置き撫でた、まるで実の息子のように
「さぁ、早く食べてお風呂に行ってらっしゃい、お片づけは私がしておくから」
「「はーい‼」」

～風呂場にて～

「なぁ灯夜」
「ん～？」
　優斗が珍しく灯夜にどこか儚げな声で話しかけてくる、いつも活発で明るい優斗のイメージがあるので、灯夜は少し驚いて間延びした返事をしてしまった
「なんかさぁ・・・こんな毎日が続けばいいよなぁ、美味しいごはんがあって、おかわりを灯夜と毎日じゃんけんで取り合って、院長が優しく呼んでくれて」
「幸せ、だよね・・・」
　二人は孤児院の広いお風呂の天井を見上げながら語り合う、まるで小説のワンシーンのように。
「じゃあぼくはそろそろ上がるよ、先に寝てるね？」
　そう言って灯夜は自室へと戻った

　誰もが寝静まった深夜・・・その違和感は訪れた。
　熱い、熱いのだ、毛布の掛けすぎや暖房機器の効きすぎなどではない、体が炙られているように熱い
　灯夜は慌てて体を起こした、すると――

燃えて、いるのだ。
比喩表現ではない、実際に燃えている。
床が壁が、すべて燃えていた。
灯夜は無我夢中で玄関に向かって走り出した。
何とか外に出ると地獄が目の前に広がっていた。
昼間遊んだばかりの遊具が、朝掃除したばかりの床が、先ほどまでいた食堂が、一つの例外もなく燃えている
孤児院の中からは仲間たちの声が聞こえる、助けて、熱いよ、誰か・・・そんな声が村中に響き渡る。
灯夜はそんな声を聞いて何もできなかった
「誰か‼誰かいませんか‼」
院長先生の声だ、灯夜はその声に反応して玄関近くまで来るも炎が壁を作り中に入ることはもう不可能だ。
「先生‼ぼくです‼灯夜です‼」
「灯夜君⁉よかった、脱出できたのね⁉じゃあ助けを呼んできてくれないかしら‼誰でもいいから大人を呼んできて！私は中にいるみんなを助けてくるから」
院長先生は灯夜にそういうと足早にその場を去った
「行かないと・・・!!」
灯夜は走った、普段より早く、みんなが死んでしまうと考えると居ても立っても居られなくなって。
孤児院から一番近い家に着きそうなときに、灯夜の意識は刈り取られた。

「うぅん・・・あ、れ？ここ、どこ？」
気づけば、どことも知れない港だった、しかし異常性はそこではない、灯夜は檻の中で十数人の同年程度の男女が入れられていた。
「あ、気づいた？」
とその中にいた一人の女の子が話しかけてきた、銀髪の、小柄で可愛らしい女の子だ、赤い目でおそらく日本人ではないんだろう。

でもなぜか日本語が上手だった。
「うん・・・君は?ここはどこなの?っ!?あと‼孤児院は!?先生たちは!?」
思い出した、孤児院が燃えてて・・・助けを呼びに行って、そこから・・・
「一旦落ち着いて?孤児院って言うのはちょっとわかんないけど、ここは船の上だよ、私たち、運ばれてるんだ・・・」
「運ばれてる・・・?なんで?」
灯夜も内心少し気づいていた、しかし孤児院のみんなのことが心配で気にする暇がなかったのだ。
「なんでって、奴隷として売られるからだよ」
その銀髪少女はさも当然のように言い放った、その雰囲気に自分が異常なのかという錯覚さえ覚えるほど、彼女の言葉は素直だった
「あのッ」
声を出そうとした時だった、誰かが檻の前までやってきた。
長身で大きい体格の男だった、その風体はまるでドラマや映画に出てくるアメリカのマフィアだ。
先ほど少女から聞いた奴隷売買、その信憑性の増していった。
「うるせぇガキ共だ、まぁせいぜいいい金になってくれよ)」
「ッ・・・」
圧倒的な威圧感、絶対に逆らうことはできないと、本能が告げていた
「そろそろ着くみたいだよ」
少女がそういうと、視線の先にどこの国ともわからない港の明かりが見えた。

底

どこともわからない港に着き灯夜を含めた子供たちは檻から一時的に開放された。
開放、と言っても自由になれたわけじゃない、手には手錠が付けられ、すべての子供が鎖でつながれている
「とっとと歩け!!」
先ほどの大柄の男が鞭を片手に怒号を響かせる
周りの人間はそんなことがまるで日常のようにこちらに見向きもせずに笑っている。
灯夜はその人々を見て『羨ましい』と心から思った
自分は住処を焼かれ、唯一の家族とも離れ離れ、どころか生きているのかどうかもわからない
そんな不安と嫉妬が入り混じった頭はいつ壊れてもわからないくらい脆かった
そのまま灯夜たちはどことも知れない町の中心部へ向かって歩かされた。
何かを話せば拳が何の加減もなく飛んでくる、そんな痛みの上に成り立つ恐怖政治からいち早く抜け出したかった。
辛い、痛い、逃げ出したい、そんな思いが頭の中をぐるぐる回っていた
「着いたぞ、全員横一列に並べ!!チンタラすんな!!」

鞭を鳴らしながら耳が痛くなるような怒号を浴びせられる
歩いた先で灯夜たちを待っていたのはおそらく町の中心部である大広場だ、夜間であるにもかかわらず最大ににぎわっている
そこではもうすでに『オークション』が始まっていた
断頭台のような木組みの土台の上では自分と同い年くらいの少年少女が泣きながら立ち、それを見て金額を殴りつけるように言い放つ大人たち
灯夜の中には恐怖しかなかった。

自分はどうなるのか、この先が怖くて仕方がなかった。
本で読んだことがある、奴隷は買い主に逆らえず、ずっと性処理玩具（ペット）として飼われたり、永遠に日の光を見ることもなく、人としての扱いを受けない
「おら！次はお前の番だ！」
そんな恐怖でどうにかなりそうな灯夜を横目に順番はすぐにやってきた。
「さぁ！残すところこの一人！今度は日本からはるばる攫ってきた男のガキだ！さぁ、いくらから始める!?」
男がそう言い放つと、どっと会場が沸いた、そして先ほど灯夜が見たように、客たちが金額を次々言っていく
「一億」
ふと男だらけのこの場にふさわしくない凛とした透き通った声が響いた、あれだけ沸いていた広場が一斉に静まり、大勢の客たちがどよめき始める。
「一億以上はいるかぁ!?いなけりゃこのまま受け渡しといくぜ」
男がそういうとその女性はすっと台の上の灯夜の横に来た
「あなた、結構タイプよ、私が買ってあげるわ」
その女性はとても美しかった、赤いドレスに身を包んだ病的なまでに白い肌、流れるような金の髪、そしてそのドレスから溢れんばかりの豊満な体つき
男なら誰しもが振り向いてしまうような美貌だった
その美貌は僅か十歳の少年にさえ通じてしまう
現に灯夜は状況を一瞬忘れて目の前の絶世の美女に目を奪われていた
「あ、あのッ」
「う～ん?どうしたのかしら坊や、あぁ・・・怖かったわね、もう大丈夫よ、安心してちょうだい」
そういうとその女性は灯夜を抱きしめた、ふわっとした女性らしい香りと、豊満な体つきの柔らかい感触が灯夜の緊張しきった心を溶かしていく。

院長のような包容力に似ているその女性に安心しきった灯夜は不意に泣いてしまう
「はぁい大丈夫よ～、私はあなたを殺したりしないからね、だから少し寝ていなさい、あとは任せて」
その女性の言葉につられて灯夜の瞼が少しずづ重さを増していく、これまでのストレスや緊張感が一気に疲労となって押しかけてくる。
そしてとうとう灯夜は名も知れぬ女性の胸で寝てしまった

抱きしめたまま寝てしまった灯夜を見て女性はその場を立ち去ろうとする
「ちょっと待て嬢ちゃん、そんなガキなんてほっといて俺と遊ぼうぜ」
先ほどの男が女性を引き留めた、もう客やオークションなんてどうでもいいといった風で今すぐにでもこの女を犯したいという薄汚い欲望をあらわにしていた
「どきなさい、私はあなたみたいな薄汚い男なんかよりこの可愛い男の子と楽しみたいの」
「いいからこっちに――!?ひっ」
男が女性の肩を持った時だった、その男の腕がなくなった、いや、正確に言えばかなり先の地面まで男の肩から先が吹っ飛ばされていたのだ
「いっでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」
「汚らわしい手で私の体に触れないでちょうだい、虫唾が走るわ」
女性は男に対して侮蔑の目を向けながら立ち去ろうとする
「おいてめぇ!!」
「女だからって容赦しねぇ!!殺すぞ!!」
仲間を痛めつけられたことに激高したほかの男が女性を取り囲んだ
「触れないで、と言っているのだけれど無駄みたいね、だったらここで全員殺すわゴールデン・ドーン」
女性が何かの名前を呼ぶとそれは現れた、黄金に輝くボディ、おとぎ話のドラゴンのような太い尻尾

ＩＳ（インフィニットストラトス）それは誰もが認める世界最強の、女性にしか扱えない兵器
「ＩＳだと!?」
「条約で制限されてるはずじゃ・・・」
「殺される・・・!!」
男たちがそれぞれ思い思いの言葉を交わし、遺言のごとく罵声を浴びせる、だがそんなもの彼女には関係がない
「さぁ、ゴミ掃除ね」
そうして黄金のＩＳはその装甲が金から赤に変わるまでそこにいる者への殺戮を始めた
無造作に飛びかかる男たちは、ゴールデン・ドーンの拳だけでその四肢をバラバラにさせる。
ぐちゃぐちゃとおおよそ人間からなってはいけない音が容易くなってしまう。
それほどまでにＩＳと生身の人間ではスペックが違う、今でこそＩＳはスポーツのみの使用が主となっているが
彼女のように平気で人を殺せる物であり、その力の前では人間など蟻んこ同然だ
踏みにじられ、蹂躙される。四肢をえぐり取られ、臓物を地面へぶちまけられる。
そんな一方的で異常な光景がとある港町の広場に広がっていた
「あなたで最後ね、死になさい」
女性がそう言い放つのは、先ほど腕を吹き飛ばした大男だ
ゴールデン・ドーンの腕で体を持ち上げ、ぎちぎちとその体を絞め殺していく、汚くおぞましいうめき声を上げながら男の体は死へと向かっていく
ブシャッと男の血液が噴水のようにあたり一面に広がる
「汚いわね・・・だから嫌なのよ・・・」
女性は鬱陶しそうにその男の血液や臓器を機体から落としていく
「・・・うぅん」

灯夜は目が覚めると、まず初めに感じたのは柔らかいという感触といい匂いだった、目を開けるとそこにはあの女性がいた、自分を買った女性だ

優しそうで、そして何よりきれいだ、美しいというほうが正しい。

だが、灯夜は違和感を感じた、さっきまでいた男たちがいないのだ、それどころか声も聞こえない、女性から向こうを見ようとしたがなぜか女性に止められてしまう。

「どうしたの？そんなにモゾモゾして？あ、もしかしておしっこ行きたいの？じゃあお姉さんと一緒に家まで帰りましょうか」

「いや、違くて・・・さっきの人たち、どうしたのかなって」

女性は少し雰囲気を濁らせた

「あなたは知らなくていいわ、それより、お姉さんじゃ話しにくいでしょ？私スコールミューゼルよ、スコールでいいわ、よろしくね坊や」

「坊やじゃなくて、灯夜、柊灯夜（ひいらぎとうや）」

女性――スコールはふっと優しい笑みをこぼすと灯夜と手をつなぎ、一緒に歩いた

後ろに山積みにされている大量の死体を気にするしぐさ一つせずに

真っ黒

その後、灯夜とスコールの二人は港町を歩いていた。
家に案内する、そうスコールに言われた灯夜だったが、いくら歩いても目的地は見えてこない
本当にこの辺りにあるのかという疑問だけが灯夜の中に悶々と残る
「あの、スコール・・・さん、おうちはまだ、ですか？」
スコールはう～んと少し考えると、一つの携帯電話を取り出した
「オータム？私よ、そろそろ迎えに来てほしいのだけれど」
『んだ？スコール、いなくなったと思ったら急に掛けてきやがって、まぁいいけどよ』
スコールは電話の主に対してクスッと笑うと再び灯夜の手を取り、街中を歩き始めた
心なしか灯夜にはその手がひどく冷たく感じた
「スコールさん」
「何かしら灯夜、もしかしてまたおしっこ行きたくなった？ちょっと待っててね、いま私のお友達が迎えに来てくれるから」
スコールは太陽のような笑顔で灯夜に接するが灯夜の顔は暗いままだ
「スコールさんは、本当に人間ですか」
その質問にスコールは驚きを隠せないでいた、というのも図星だからである
スコールの体はすべてではないにしろ機械に置き換わっている、しかし感触や見た目は完全に人間そのものである
それを灯夜は言い当てたのだ
「スコールさんの手、普通に暖かいんですけど、なんかどこかで冷たくて、失礼ですけど人の温かみがないっていうか」
スコールは何も言わなかった
ただ一言、「そうかもしれないわね」
と灯夜を茶化した

「この辺りでいいかしら、ちょうど人通りも少ないし」
スコールは先ほどとは違う少し広めな場所に出ると、周りを疑うように見ながらそう言った
「オータム!出てきてちょうだい」
スコールがそういうと、何もなかった場所から突然異形の機械が現れた
その異形は全身が黒ずんだ血のような赤色で所々、金の装飾が散りばめられていた
なんといってもその異形の最大の特徴は、まるで蜘蛛のような足で人体のようなものが見えることから灯夜はおとぎ話に出てくる蜘蛛の異形、アラクネのようだと思った
「スコール!呼び出してくれるのは嬉しいけどよ・・・って何だこのガキ」
「あ、あのッ」
「さっき奴隷オークションで買ったのよ、可愛らしいでしょ?」
そのスコールの発言にオータムと呼ばれた異形の主はケッっとどこか不機嫌になった、どうやらオータムはスコールのことが好きらしい、女性まで惚れるほどの美貌の持ち主だということを灯夜は改めて理解した
「さぁ、行くわよ」
スコールはそう言うとオータムと同じようにゴールデン・ドーンを展開した、灯夜にとっては初めて見るＩＳで、恐怖よりも好奇心のほうが大きかった
「え?スコール、さん?」
「あぁ・・・驚かせちゃったわね、これは私専用のＩＳよ、ゴールデン・ドーンっていう名前なの、よろしくね」
スコールは変わらず優し気な声で灯夜を抱きかかえると、灯夜に負担がかからないように優しく浮遊した
後日譚だが、オータムはそんなスコールと灯夜を見て終始イライラ

していたという

どこかの海の上で二つの光が線を描き美しく飛んでいる
その姿はさながら絵画のようで、どこか幻想的な雰囲気を漂わせている
この時間になると、さすがに海の魚たちも寝ているのか、トビウオなどは泳いではいない
代わりに、かなり透き通った海なので海中のクラゲやサンゴなどが少し光っていてこれもまた幻想的だ
「これが・・・海、綺麗だなぁ」
灯夜は生まれてから一度も海に行ったことがなく、テレビで数えるほどしか見たことがないため、海についてはほぼ無知だ
「海がそんなに綺麗かよ、純粋な目ぇしやがってよ」
そんな灯夜の姿をみてオータムが物珍しそうに話しかけた、彼女たちにとって海は少なからず通る場所であり、じっくり見たこともなければ今の灯夜のように綺麗だなんて思ったことすらなかった。
羨ましい、とオータムは純粋に思った。
そんな様子の灯夜を見てスコールはもっと見せてあげたいと思ったのかなるべく海中が見えるように低空飛行をしていた
その時の三人はさながら親子のように仲睦まじく幸せに見えていた

「さぁ、着いたわよ」
そう言ってスコールたちが降り立ったのはどこかの島の浜辺だった。
何の開拓もされていない、所謂無人島のような風貌のその場所に灯夜は違和感を覚えていた
なんというか、見た目は自然なのだ、しかしどこかで作り物のような小綺麗さがある
「こっちよ灯夜くん、ついておいで」
「離れんじゃねぇぞ」

そう言う二人にどことなく安心感を覚えて、まるで小動物のようについていった
「まぁ・・・本当に可愛らしいわね、食べてしまいたい」
その言葉は後ろでついていく灯夜には聞こえなかった
「さぁ、着いたぞ」
「ようこそ私たちの家、亡国機業(ファントムタスク)へ」

灯夜はその後、無人島の見た目にカモフラージュされた建物の中に入っていった
やはりというか、灯夜の勘は当たっていたようで、ここは外から発見されないように、完全にカモフラージュされているようだった
灯夜は案内された部屋に入った
決して広くはないが、あんな檻よりは広く、そして快適な部屋だった
ベッドが一つと勉強机にも見える机が一つ、そしてテレビが一台あった
灯夜はすぐさまテレビを付けるが、そこに日本語のニュースは流れてこない
もし日本のニュースが流れているなら今すぐにでも家族の安否が知りたかった。
灯夜が途方に暮れていると、コンコンと木製の扉から音がした
「スコールよ、入っていいかしら?」
「あ、どうぞ」
そう言うとスコールは灯夜の部屋に入ってきた、ただ手にトレーを持っているので、おそらく食事を持ってきてくれたのだろう
そう思うと灯夜の腹がぐぅ〜と鳴った
「あらあら、そんなにおなかを空かせてたのね、はいどうぞ」
「スコールさん、聞きたいことがあるんですけど」
スコールはトレーを置きながら、ん?と返事をするとベッドに座り、灯夜の話を聞いた
「ある村で孤児院があって、そこが火事で燃えてて、その火事の生きて

る人を知りたいです」
「孤児院の火事ね・・・わかったわ、調べてみるわ」
「ありがとうございます!!」
灯夜はスコールにお礼を言うと、目の前に差し出された料理を口にした
「おやすみ、可愛い灯夜くん♪」
楽し気にそう言うスコールの目には、真っ黒な欲望が渦巻いていた
灯夜はその目に気づくことなく、楽し気に数十時間ぶりのご飯を美味しそうに頬張っている。
その先にある地獄も知らずに――――

灯夜は真っ暗な景色の中で目を覚ました
「(あれ?寝ちゃってたのかな・・・あの後、スコールさんとご飯食べて、なんだか急に眠くなって・・・その後ぼく、何してたっけ?)」
灯夜は少し前の記憶が少し抜け落ちていた。
思い出そうとするも何かモヤがかかっていてよく思い出せない
「(とりあえず起きよう・・・)」
そうして灯夜は体を起こそうとした、いつもと同じように、それが当たり前であるように
「(あ・・・れ?)」
しかし、灯夜の体は起き上がらなかった、いや、起き上がれなかったのだ
やがて視界が少しずつ晴れ、周りもだんだんと見えてくるようになる、そして灯夜がなぜ起き上がれないのか、その真相すらも明らかになってしまう
「(なん・・で)」
暗闇の中で灯夜が見たのは、自分の両手足につけられている拘束具だった
まるで手術台のような広い台に張り付けられた自分の前には、まるで今からされる拷問を見ておけと言わんばかりに大きな鏡がある

「あらぁ？起きたの？さっきはひどい声で泣いていたのに・・・もう起きちゃったのね、まぁいいわ、これで実験もやりやすくなるし、何より若い男の子の悲鳴って、私大好きなのよねぇ・・・」
そう言って自身の唇を舌で舐めるスコールを見て、灯夜は恐怖しか感じなかったが、それよりも気になることがあった
「（スコールさん、さっきって言ってたよね、さっきって・・・）」
その結論を出す前に灯夜は見た、見てしまった
先ほど見た自分の腕、その先の地面におびただしい量の血液が散っていた、まるで人が一人死んだかのような量の血は、もともとは白かったであろう床を真っ赤に染め上げている。
見るも無残なそれには、不可解な点があった、普通これだけの量の血が出ているのであれば人が一人死んでいてもおかしくはない、なのに死体一つ転がっていないのはなぜだ？
仮に死体を処理していたとしても多少なりとも引きずった跡が残るハズ、なのに引きずった形跡すらない
そして、最後・・・床の血はなにか一体を中心として広がっている。
その中心にいるのは――――灯夜だ
「ん〃ーー!!ん〃――!!」
灯夜の口からは想像を絶する叫びが吐き出される、しかしそれは口につけられた猿轡（さるぐつわ）のせいで完全に吐き出されることはなく、ただむなしさだけが残る
前方に設置された鏡をよく見ればそこには体中を傷だらけにされ、血だらけの灯夜がいた
そう、あの睡眠薬の入ったご飯を食べた後、灯夜はスコールにここまで連れてこられ、そして拷問を受けた。
そうだ、拷問はすでに始まっていたのだ
そんな体中がボロボロで壊れてしまう寸前の灯夜にさらなる追い打ちがかかる
「あぁ・・・そういえばさっき灯夜くんが言ってた火事の件、調べておいたわよ」
そうしてスコールはプリントアウトしてきたであろう資料をぱら

ぱらとめくっていき、最後にはそれを地面へと叩きつける
　それらは地面にこびり付く灯夜の血液で一瞬にして赤く染まり、もはや目では読むことさえできない
　それでも必死に台の上から地面を見ようとする灯夜、それほどまでに孤児院の皆が、家族が心配だった
　いつも優しく笑いかけてくれる院長
　じゃんけんにはいつも勝つけど、勉強になると灯夜に勝てず悔しがり、どんな時も一緒にいた優斗
　そのほかにもいろんな子供たちが灯夜と接点を持ち、遊び、学び、ともに暮らしてきた
　そんな日常は戻ってこないかもしれない、でも生きていてくれたら、きっと会える
　だから――――
「全員死亡、焼死ですって」
　その一言を聞いた瞬間、灯夜の視界は真っ暗になった
「なんだか火事の後一か所に集まって、助けを待ってたらしいわよ、『子供を抱きかかえる女性の遺体は柊孤児院の院長である咲良琴音であることが判明、そのほかの子供たちも身元を特定中』さぁ灯夜くん・・・どんな気分かしら?どんな顔をしているのか見せてちょうだい・・・・!」
　そう言うとスコールは猿轡を外し、灯夜の髪をつかみ強引に顔を見る
　その灯夜の顔は、絶望に打ちひしがれていた
　たとえ奴隷として売られても生きていればまたみんなに会える、それだけを心の支えに生きてきたのだ。
　その支えが今、崩壊した。
「もう・・・殺してください」
「あなた、今なんて言ったの?」
　スコールは少し雰囲気をピリつかせ、灯夜に質問した
「殺してください・・・ぼくにはもう、生きる価値なんてない・・・先生との約束を守れなかった、ヒーローなんていない、神様も!だから

もう！殺してくれ！ぼくを‼この苦しみから・・・！解放してくれ・・・」
灯夜の心からの本心だった
だがそれを支配者（スコール）は決して許さない
「フフフ・・・アハハハハハ!!殺すわけないじゃない!!こんな!!可愛い坊やの絶望しきった顔を見て！私が！私はねぇ・・・灯夜くんみたいな可愛い男の子の絶望に浸った顔が大好きなの！昼間殺した男どもなんかじゃ満たされない!!あなたが私を満たすの!!だから殺さない、だから生かす!!」
スコールは今までのクールな様子と違い狂ったように言葉を吐き散らかす。
しかしそんな言葉など聞こえていない灯夜はただ存在しない神にむかって懺悔していた、意味のないことだとわかっていながら、神はいないと先ほど自分が言ったにもかかわらずに
「これからね？楽しみましょ!?灯夜クン!!」
その日から、誰もいないはずの無人島から、毎晩叫び声が聞こえるようになったという

回帰

灯夜がこの無人島にカモフラージュされた亡国機業（ファントムタスク）の拠点へ連れてこられて約二年の歳月がたった
それまで灯夜はずっと、実験や拷問、動物を使った殺傷訓練や戦闘訓練をさせられ続けた
体中に付けられた数々の傷跡がその日々の凄惨さを物語っている
実際あの日から灯夜の心はとうに壊れてしまっていた
今では一日中自殺の方法を考え、実行している
しかしスコールが自殺など許すはずもなく、灯夜の心は次第に死んでいった
あれほど艶があり、短かった髪の毛も今では抜け落ちたような白髪であり、前髪は片目を隠せるほど伸びてしまっている
実験の邪魔になるからなのか、襟足だけは綺麗にまとめられていた
そして今日もその凄惨な実験が始まってしまう
自殺防止用に灯夜の腕は常に縛られ、自由など程遠い
灯夜の部屋の扉がいつもと同じように重々しく開き、そして見慣れた白衣が灯夜の視界を埋め尽くす
最初こそスコールがいつも出迎えたが、実験を重ねる度にに心が死んでいき、次第に声すら出さなくなった灯夜を見て、飽きたのか今では研究員と思しき人物たちが灯夜の部屋にやってくる
いつものように目隠しをされ、手錠をかけられてあの手術台の部屋へと向かう、そんな灯夜の足取りに躊躇はない
まるでそれが当然のように
「これより、被検体へのＩＳコア移植手術を行う」
その研究員の発言は、死んだ灯夜の心の中を駆け巡った
「（ＩＳコアの移植？なんでそんな事を？）」
灯夜にとってＩＳとは女性にしか扱えないモノで男である自身にそのコアを移植したとしても意味がない
しかし亡国機業側はそうは思っておらず、男性でもＩＳを使える可能性を見出していた、しかしそれは非人道的な行為である、なぜなら

それはＩＳコアを移植した男性の脳を書き換え、最強の兵士にさせる、その計画の手始めとして灯夜を第一号にしようとしているのだ
　ある程度の手術が終わり、灯夜の意識も回復してきた
　そこで灯夜にある小言が聞こえた
「このガキも可哀そうなもんだよ、男の復権のためとはいえＩＳコアを移植されてその上脳を書き換えられるんだからな」
　灯夜の脳が二年ぶりに揺さぶられる、今この研究員たちは何と言った？
脳を書き換えられる？
「（なんでぼくが・・・こんな目に合わなくちゃいけないんだ、みんな、なんでぼくをこんなにいじめるんだ・・・ぼくは何もしてないじゃないか、なんで・・・なんでなんでなんでなんで・・・）」
　灯夜の中で疑問と怒りが交錯する、そんな中、ある研究員が異常に気付く
「・・・!?ＩＳコアとのシンクロ率急上昇!?そんな・・・ありえない!!」
「どうした!?」
　その研究員が騒ぎ出したのをきっかけに周りのほかの研究員たちも異常に気付く
　灯夜の心拍や健康状態をモニタリングした画面、その中の移植したＩＳコアとのシンクロ率を示すメーターが急上昇していた
「ＩＳコアとのシンクロ率９０％突破！拘束、破られます！」
「殺傷部隊を呼んで来い！それとスコール様に報告を！」
　周囲が慌ただしく動く中渦中の人である灯夜は頭の中に響く声に向き合っていた

「ここ・・・どこ？」
　灯夜はどこともわからない場所に一人で立っていた
　確か自分は手術台の上で拘束されていたはず、なのにいつの間にか風が心地いいどこかの草原に移動していた、夢かとも思ったがあまりにもリアルすぎる

それにどこか懐かしい・・・まるで昔の――
そこまで灯夜が考えた時だった
後ろから聞こえた、あの声が
思い出したくもない、しかし忘れることはできないあの日の声
そう、あの火事の日だ
燃え盛る炎、それらは寝室を、食堂を、風呂場を、今まで過ごしてきた場所、大切な場所がすべて焼き尽くされている
その光景を、二度目だというのに灯夜はただ茫然と立ち尽くしていた
まるで、何をしても無駄だと言わんばかりに
『貴様はそれでいいのか?』
「誰・・・?」
突然どこかから声がした、初めて聞く声だというのにその声はどこか懐かしさを感じる
周りを見渡しても、その声の主は見当たらない、なのにまるで隣にいるかのように声は聞こえる
『貴様はただ茫然と立ち尽くし、何もできないままま家族が死んでいくさまを見ているだけでいいのかと聞いている』
声の主はそう言うと、灯夜の前に姿を現した
その少女はまるで人形のように整った顔立ちで、黒く長い髪は艶やかでまるで星空のような印象を受ける
何といっても一番の特徴は額に黄色く発光する鬼のような角が二本生えているのだ、それがこの少女が人ではない異形のモノだということを伝えている
「君は?」
『答えろ、柊灯夜、貴様はこのままでいいのか、それともすべてを変える力が欲しいのか、さぁ・・・どちらだ』
灯夜は考えた
自分はもう全て失ってしまった身だ、そんな灯夜がいまさら力を手に入れたところで、何も変わりはしない
ただ今は、この状況から抜け出したい、そしていち早く死んでしま

いたい
「ぼくには、すべてを変えるだけの力なんていらない、でも、ここで僕が脳を書き換えられれば二度と僕は死ねなくなる」
灯夜はぐっと拳を握った、それは覚悟の表れだろうか、手からは少量の血が出ている
「だからぼくに、ぼくを殺せるだけの力をください」
『フフフ、ハハハハハ!!!面白い！いいだろう、力を与えてやる』
少女はそう言うと灯夜の胸に手を置いた、すると灯夜の体を光が包み込む
『では達者でな柊灯夜、その体で死んでみせよ』
次の瞬間灯夜の意識は浮遊感とともになくなっていった

「鎮静剤の投与を急げ！縛りもキツめにしておけよ！」
灯夜が目を覚ますと周りの大人たちは騒然としていた
そして灯夜はあることに気づく、体が異様に軽いのだ
それに加えて、先ほどまで自分の両手首を締め付けていた拘束具がまるで存在しないかのように腕が軽かった
「被検体、覚醒しました！」
「鎮静剤は!?」
「だめです！間に合いません！」
周りのそんな声などは気にすることなどせずに、それまで貼り付けにされていたのがウソのように拘束具を引きちぎり、堂々とその体を起こす。
その様子に周りは騒然とし、誰一人として動ける者はいなかった。
「行か・・・ないと」
灯夜はそうつぶやくと、ふらふらと扉から部屋を出ていった

島の末端部、岩礁ばかりが目立つその波打ち際の崖の上、サスペンスドラマのラストシーンのような場所に灯夜は来ていた。
「灯夜ァ！もう逃げられねぇぞ！おとなしく戻りやがれ！」

そう荒々しい声で言ってくるのはオータムだ、あれから少ししか顔を合わせてはいないが、やはりというか、口調は相変わらずだ
よく見ると後方にゴールデン・ドーンを纏ったスコールもいた、彼女の嗜虐的な笑みに恐怖を覚える灯夜だったが、今はそんなことはどうでもいい
「あらぁ?ただのモルモットが随分な勝手をしてくれたじゃない・・・さぁ、あなたにもう戻る道はないわよ?おとなしく――ッ!?」
スコールが言葉を言い終わる前に灯夜は崖めがけて走り出した
「あんたらに好きにされるよりはこっちのほうが幾分かマシだよ」
今までの口調とは打って変わった灯夜、そんなことはどうでもいいと言わんばかりに崖の先の荒波へと飛び込んだ
最後に灯夜が聞いたのは、スコールとオータムの行き場のない叫びだった

ドイツのある浜辺、そこで一人の少女がランニングをしている、動きやすそうなアンダーシャツと短パンに身を包んだその少女は太ももの位置につけてあるナイフホルダーからナイフを取り出し、目の前の仮想敵に向かってナイフを振り下ろす
そんな見た目と行動のギャップが激しい彼女はその銀の髪をなびかせ、海を見る
そんな少女の目には光はなく黒く淀んでいた

一章　出会い
新地

ザザァ、ザザァという波の心地いい音と共にトレーニングを終えた少女・・・ドイツのＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の隊長であるラウラ・ボーデヴィッヒは少しは足早に歩いている。
この後はラウラが教官と呼び敬意を払う女性、世界最強の女性である織斑千冬が指導をしてくれる訓練があるのだ
彼女を尊敬しているラウラにとって、訓練時間に遅刻するなど言語道断、今日は早めにトレーニングを切り上げてこうして自身が所属する軍の基地へと向かうのだった
なぜかふと、いつも見ているはずの海が気になり、チラッと海がある左側に顔を向けた
すると何ということだろうか、白髪の人らしきものが砂浜ギリギリの浜辺で浮かんでいた
「ッ!?なんであんなところにッ」
ラウラは自身の専用機であるシュヴァルツェア・レーゲンを展開し、その人物の人命救助へと向かった

「・・・またここか」
灯夜はそう言って目を覚ます、目を覚ますと言っても先ほどのあの日の映像の中にいるだけなのだが
「ここにいるってことは、まだ死んでないのか俺」
ん?今何と言った?俺?
灯夜は基本自分のことをぼくとしか呼ばず、俺などとは今まで呼んだことすらなかった
『戸惑っているようだな、柊灯夜』
灯夜は自身の中で整理がつかないままだったが、突然後ろから聞こえた声に思考を一旦中断させる
『貴様の中にこの我(オレ)、ＩＳコアが入っているのは承知しているな?』

「てことはやっぱりお前は俺の中のコアか、で？それがどうしたって言うんだ、というか女の子なのに我(オレ)って言うんだな」
あまり驚かない灯夜にふん、と相槌を打つと、ＩＳコアは話始める
『いま、貴様と我(オレ)の体は一心同体、つまり精神すらも、意味が分かるか？』
ＩＳコアは灯夜に確かめるように話す、僅か１２歳の少年に話すのだ、気を使っているのだろう、少し高圧的な態度ではあるが根は優しいらしい
「つまり、お前の心が俺の心に入り込んでるってことか？」
『正解だ、自覚しているかは知らぬが貴様の心はもう再建不可能という具合までに壊れている、だから貴様の心にもすんなり入ることができた上に、こうやって話もできている』
灯夜はなるほどと、思ったがしかしそこまで自分の心が壊れているなんて思いもしなかった、というより自分のことなんてどうでもよかった
「とにかくお前が俺の心に入って、いろいろ補填してくれてるってことでいいんだよな？」
『ああ、ただしそちら側にも影響はある、今は些細なものであるがな、その証拠に口調が変わっているだろう？』
ＩＳコアがそう言ったところで少しめめまいがする
『そろそろ目覚めの時間か、では最後に我(オレ)の名を名乗っておこう』
ＩＳコアはそう言うと腕を組んで高らかに宣言した
『我が名は轟絶鬼(とどろき)！死を得んとする我が主よ、精々我(オレ)を上手く使えよ？』
そう言うと彼女・・・轟絶鬼(とどろき)は少し笑った
「・・・い、おい！」
どこかで誰かを呼ぶ声がする、おそらく自分ではないだろうと灯夜は思った、だってこの世で灯夜を呼ぶ人間なんてもう、いないのだから
「おい貴様！生きているのなら返事をしろ！」

「(誰を呼んでいるのかはわからないが、服も濡れてて気持ちが悪いし、そろそろ起きよう)」
　そうやって灯夜が目を開けたとき、その少女はいた、美しく艶がある銀の髪、病的なまでに白い肌、そして可愛らしくも凛々しい顔つき、極め付きはルビーのような赤い目、だがその目にどこか光はなかった
　この少女を見てなぜか真っ先に思い出したのは二年前の、檻の中で灯夜と話していた少女だ
　その少女が灯夜の視界を埋め尽くしていた、まるでキスする直前だ
「お、起きてまーす」
「起きたのならいい、しかし貴様、日本人か?なぜここにいる?あと・・・どこかで会ったことはないか?」
　灯夜の動揺などどうでもいいかの如く質問を投げかけてくる
「ところでここはどこなんだ、それに君は?」
「質問を質問で返すな、まず回答を言え」
　まるで機械のような子供だと灯夜は思った、しかし彼女の鋭い眼光は人を殺してしまいそうな勢いだったので、質問に答えることにした
「あーまず俺は日本人だ、こんなナリだが純粋なな、あとここに来たのは故意じゃない、海に飛び込んで気が付いたらここにいたんだ、最後に君に似た人は会ったことはあるが、君みたいな子に会ったことはない」
「そうか、嘘を言っている素振りはないな・・・貴様、身よりはあるのか?」
　ラウラはふむふむという風に顎に手を当てる
　少し考えると、灯夜の顔をじっと見つめる
「よし、貴様は今から私の基地に来てもらう、いいな?」
「いいのか?俺みたいな誰とも知れないやつを入れて」
　ラウラは問題ないというと、灯夜を連れて歩き出す
　十二歳でまだ成長途中の灯夜から見ても、ラウラは小さい、なのに自分よりもどこか大人びていて、どこか寂しげだった
　そんなラウラを見て灯夜は手を握ろうとした
「・・・何をする貴様」

「いや、気を害したならすまん、ただどこか寂しげだったからな」
ラウラは基地までの間だけだぞと言い、それまでの道を二人で歩いた

ある海の底、そこには海底にはふさわしくない潜水艇が佇んでいた
その中はまるで童話のお姫様が過ごす部屋のように数々の装飾が施されている
その中心部、所狭しと並べられたパソコン群の中に彼女はいた
機械でできたうさ耳をカタカタと動かし、目の下に隈を作りながらも余裕の笑みで液晶画面を見つめている
その画面には天災と呼ばれた彼女しかわからないような情報が埋め尽くされている、だがそれはよく見ると、ある人物に関しての情報が主であると認知できる
「う～ん、やっぱりとーくんに埋め込まれたＩＳってあの子だよね～そうじゃなかったら異常な再生能力も説明がつかないし～それに私のネットワークから唯一独立してなきゃ探索にで見つけられるのにね・・・私ってばあんな子供まで作っちゃうなんてやっぱ天才だよねぇ、それにしてもたかがゴミムシが私の子供を好き勝手にしてくれたもんだよ～いっそ該当範囲全部爆撃しちゃおうかなぁ！」
彼女・・・天災でありすべてのＩＳの生みの親である女性、篠ノ之束は可愛らしい声のままそんな恐ろしいことを口にする、それもそうだろう、束が探している人物である少年・・・柊灯夜は現在もなお自身に埋め込まれたＩＳ、轟絶鬼と共に逃走している
普通であればたった一人の人間の情報や今いる場所などはほんの数秒で見つかるのだが、今回はわけが違う、というのも灯夜に埋め込まれたＩＳコア、それが原因だった
灯夜に埋め込まれたＩＳコアである轟絶鬼は束が開発した最初のＩＳコアであり、現在世界中に散らばっているコア４６７個の中でも特別なものだった
普通ＩＳにはコアネットワークというものが存在し、そこからさまざまな情報を取得できたりするのだが、轟絶鬼にはそのコアネット

ワークが存在せず、さらには他のＩＳとは違い、明確な人格が備わっているため、本人が意図して束から隠れることが可能であり、さらには轟絶鬼が灯夜に埋め込まれてしまったため、灯夜も同時に探せなくなってしまったのだ
「なんでこう、探したいものと探せなくなる要因がうまく噛み合っちゃうかなぁ・・・」
　束は苛立ちを隠せないまま呆れたようにはぁ・・・とため息を吐く、今日で十徹になる
「ん？今変な位置でＩＳの反応起きたよね・・・？なんでそんなところに？ってあ！」
　束はその反応に気づくと大きく体を前に乗り出し、まるで子供が新しいおもちゃを見つけたかのごとく先ほどまで眠気と疲労がたまっていた目をキラキラさせる
　その表情からは到底想像がつかないような速さで端末を操作する。
　だが虚しくもそこに映し出されたのは崖の上から飛び降りる灯夜だった
「とーくん！このゴミムシどもが・・・！」
　束はまるで鬼のような形相で画面を睨む、そして画面に映し出された虫――亡国機業（ファントムタスク）の面々へ向かって攻撃を始めた
「絶対に見つける・・・見つけてあの時のお礼を・・・！」
　そう言う束の表情は、今この世にいる誰よりも純粋だった

邂逅

浜辺から十分ほど歩いたところ、町の郊外にそれはあった
黒兎の旗が目立ち、男子禁制と言わんばかりに入り口には女性の守衛が立っている軍の基地があった
その光景に灯夜は少し不安を覚える
「ここだ」
ラウラは短くそう言うと、握られていた手を放し、堂々と基地へと向かっていく
「あ!おい!置いていくなよ・・・」
灯夜はラウラの態度に少し疲れながらも、助けたもらったと思うと文句の一つも言えなかった
「隊長!お帰りなさいませ、シャワーの準備ができていますので・・・ん?そちらの男性はどちら様でしょうか?」
「あぁ、こいつは浜辺で倒れているのを見つけた、身寄りがないと言うのでここに置いてこうと思ってな、あとで上には私が報告しておく」
「珍しいですねぇ・・・隊長が男連れてくるなんて」
守衛の女の一人が茶化すように言ったが、ラウラは下らん、と一蹴した
そんなラウラの言葉に守衛の女は驚いた、ラウラは普段、人命救助などするような性格の人間でもなければ、見ず知らずの人間を自分の住処に入れるなどありえない、実際、恋路ではないにしろ男を連れているのだ、驚くのも当然であろう
だが後ろの男、灯夜は何故守衛の女が驚いているのかを理解できずに自分がここに来たことに驚かれているのだと勘違いして少し居心地の悪さを感じた
「あーやっぱり俺が来るのはまずかったか?」
ラウラは問題ない、と言うと強引に灯夜を基地の中に引き連れる
シュバルツェ・ハーゼの基地内、そこでは今この瞬間、かつてないほどの混乱が起きていた

その原因はたった一つ、シュバルツェ・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の隊長であり基地で一番近寄りがたい存在とされている女性、ラウラ・ボーデヴィッヒが基地内に部外者の男を連れ込んでいるという情報が出回ったためである
「伝達兵は今すぐに隊長の調査、および連れ込まれた男性への尋問を開始せよ、到着した情報は必ず私に報告すること、以上、解散！」
「「はっ！」」
そう言って少女たちは一斉に基地に散らばる、その中心で指揮を執る女性こそが黒ウサギ隊の副隊長であるクラリッサだ
彼女は自称隊長愛好家であり、ラウラの身辺を２４時間３６５日にわたってストーカー・・・もとい調査をしている
そんな彼女が見つめるモニターの中には件の少年、灯夜とラウラが映し出されていた
「ここにいろ、多少居心地は我慢してくれ」
連れてこられたのは少し広めのワンルームで、家具はベッドとテーブルしかない、どこかあの亡国機業にいたころの部屋と似た雰囲気ではあるが、灯夜は部屋に入った
「わかった、そもそも助けてもらって居心地がどうとかは言わないよ、でもほんとに俺が来てよかったのか？えっと」
灯夜はしまったと思った、というのも少女、ラウラの名前を聞いていないのである
「そういえば自己紹介がまだだっけ、俺は灯夜、柊灯夜だ、まずは助けてくれてありがとう」
「私は名乗る義務など持ち合わせてはいないが、名乗られたのなら教えておこう、私はラウラ・ボーデヴィッヒ、この部隊の隊長を任されている」
二人はお互いに自己紹介し合うが、どこか壁があり、和んだ雰囲気ではなかった
そんな光景を見ながらムズムズしている人間が一人・・・
「いや、ピュアかッ!?そんな合コンに初めて来てなんだか取り残された男女のペアじゃないんですから!!あーもうムズムズするぅ!!」

「副隊長、どうか落ち着いてください、そろそろ動きます」
クラリッサはそんな二人を見て心底むずがゆい気持ちになりつつも、二人のことを見守る、その姿はまるで子供を見つめる親のようだ
「では私は上にお前のことを報告しに行ってくる、ここを動くなよ?」
「勝手もわからない場所で好きに動けるほど肝は据わってないよ、大丈夫、ここにいるから」
ラウラはそうか、と言うと部屋から出て行ってしまう
「さてと・・・見てるんだろ?」
その瞬間モニター越しのクラリッサの心臓は飛び跳ねた、というより、心臓を掴まれたような悪寒がした
「総員突入!」
一瞬気圧されたもののほんの数秒で元に戻ったクラリッサは灯夜を危険視し、待機させていた他の部隊員を突入させた
「抵抗するな!腕を後ろに組んで地面に伏せろ!」
「おっと、ホントに見てたのか、しかしこのスピード、部隊ってボーデヴィッヒさんは言ってたけどさすがだなぁ」
灯夜は部屋の入り口から入ってきた数名の女性に向かって驚いた様子を見せる、殺気にも近しい意志を灯夜にぶつける女性たちに囲まれて圧倒的に不利な状態にあるにも関わらず灯夜の口調はどこか余裕を孕んでいる
「っと、こうでいいか?」
灯夜は意外と素直に腕を後ろに組み、地面に伏せた
警戒を解いたのか、周りの女性たちが灯夜に近づいてくる
「無警戒すぎ」
その無防備な瞬間を灯夜は見逃さず、素早く足を地面に刷らせるように蹴り、周りの女性たちを一気に無力化する
その手に人を殺害できるような代物はなくとも、灯夜は拳を倒れた女性に振りかぶろうとする
しかし、その拳は女性の顔に当たることはなく、そのまま地面へと放たれた、灯夜の拳が炸裂した地面は少しのクレーターができており、そんなものが自分の顔に直撃していたらと女性たちは顔を青ざめ

る
　そんな女性たちの顔とは対照的に灯夜の顔は泣いていた
「あれ？俺今何を？」
　灯夜の頭は今自分がやろうとしたことを思い出そうとする、そして灯夜は気づいた、自分がこの女性を殺そうとしたことを
「・・・ッ」
　灯夜はそんな事実から逃げるようにして、部屋を飛び出した
「副隊長、今のは・・・？」
「ありえない・・・ただの一般人にあんな芸当ができるはずがない、しかし何故・・・？とにかく突入部隊はターゲットの捕縛を優先して」
　クラリッサは今自身が見たモニターの映像について思考を巡らせるも、結論は出てこない
　そんなクラリッサを嘲笑うかのように灯夜は姿を消した

「何処だここは・・・あぁ、また迷った」
　灯夜は部屋で襲撃されたあと、基地内を走り回っていたが、さすがに疲れたのか格納庫のような場所でひっそりと息を潜めている
　その場所はあまり使われていないのか埃がたまっており、格納庫というよりは物置のような場所だった
「あぁ・・・疲れた・・・ホントになんで俺ばっかりこんな目に遭うんだろうな、そういえばボーデヴィッヒさんとの約束破っちゃったな」
　灯夜は自分がしたことは恩を仇で返したものだと思っていた、しかもラウラの部下であろう人間を殺しかけたのだ
　そんな考えが灯夜の中でずっと巡っていた
　つかれた灯夜は後ろにあった壁らしきものにもたれかかった、その時だった
「・・・あ？」
　思わずそんな素っ頓狂な声が出てしまう
　それもそうだろう、何せ灯夜が壁だと思っていたものが突如として光りだしたのだから
　そして灯夜の頭の中にラファールという名前とそれに関する様々

な情報が一瞬で流れ込んできた
「これ・・・ＩＳか?」
　先ほどより目線が高いことに気づき、灯夜は自分の体を見つめる、するとどうだろう、二年前テレビで見た汎用ＩＳの一つであるラファールが自身に装着されているではないか
「ちょっと待って!今ここから光が・・・って、え!?なんで・・・」
　灯夜はそんな声に気づき、逃げようとするもＩＳの動かし方がわからず、そのまま捕縛されてしまった
「副隊長・・・彼は一体・・・」
　灯夜が捕縛された後、現場へ向かったクラリッサは部下からそんな質問を投げかけられる
「私にもわからない、ただ一つ言えるのは・・・彼も私たちと同じように、普通の人間ではないという事実だ」
　クラリッサが見つめるその先には獣のような眼光の灯夜がおり、その瞳は紅に染まっていた

希望

基地の所長室への廊下で、ラウラは珍しく他人について考えていた
他人というのも、先ほど救助した少年、柊灯夜のことだった
ラウラは灯夜を見た瞬間、らしくもない人命救助をしてしまった、軍に身を置いている以上救助をすることもあるがなんせここはＩＳ配備特殊部隊、大きい声では言えないが、どちらかといえば攻める側の部隊であり、救助などはあまりしない、訓練でも数えるほどしか救助活動をしていない
「何故あの男を見たときに見覚えがあったんだ、私は・・・？」
ラウラは所謂試験管ベビーであり、人口の生命体である
ドイツの科学者たちに作られた彼女は過去なんて持ち合わせてはいない、だから何故灯夜を知っていたのかが説明できなかったのだ
様々な思いが胸の中を駆け巡っているうちに所長室まで着いてしまう
「とにかく報告だ、あとで教官にも顔を合わせておこう」
余計な考えを取り払い、ラウラは所長室をノックした
余談だが、ラウラに灯夜の捕縛報告が言い渡されたのは、数時間後だった

「起きろ、柊灯夜」
狭い空間で、凛としながらも力強い声が響き渡る
灯夜が目を開けるとそこはなんだか実験室のようだった、全体的に白い空間、そして数段高いところはマジックミラーのガラス張りになっておりこちらから向こうの様子はうかがえない
「あぁ、誰だ？俺は・・・そうか、ＩＳを起動してそれから捕まったのか、ハハ・・・我ながら無様だな」
「まず自己紹介をしようか、私はドイツ軍所属、シュバルツェ・ハーゼの副隊長、クラリッサだ」
灯夜が自称的に笑うも、どうでもいいといった風にクラリッサは続ける

「冷たいな、全く・・・もう少し話してくれてもいいんじゃないか？」
「黙れ、今から私の言う質問に答えろ、お前は部外者だ、射殺しようと私の勝手だ、いいな？」
　クラリッサはそう言うと質問を始めた
「まず、お前は男だな？」
「付いてるものは付いている、俺がＩＳを動かしたからと言って女だと思うな」
　その後も質問を絶え間なくされるが、灯夜はやましいことも隠していることも特にないので、スラスラ答えていった
「では最後に、お前は何だ？」
「ん？やけに具体性のない質問だな、まぁいいが・・・」
　灯夜は少し呆れたように言うと、言葉を続けた
「一つ、俺は人間だ、二つ、戦闘訓練を受けてはいるが、人を殺したことはない・・・まぁ先ほどは殺しかけたがな、三つ、多分これが質問の回答になるだろうな、俺の体にはＩＳコアが埋め込まれている、名前は轟絶鬼でどういうわけか自我がある、俺が眠るたびに話しかけてくるぐらいには好かれているとは自負している、おそらく俺にＩＳが動かせたのもこいつが原因だろう」
　その発言にクラリッサ含めそこにいたシュバルツェ・ハーゼの面々は戦慄した、人のそれも男性にＩＳコアを埋め込む、そんな行為に人の心は耐えられるものなのかと、それに灯夜は齢十歳にして家族を失い、そして亡国機業に買われ、今まで実験を繰り返されてきた
　それをこの少年はあっけらかんとした態度で言うのだから恐ろしい
「わかった、質問は以上だ」
「なんだ同情でもしたか？随分とあっさり解放するんだな」
　そんな灯夜の問いに、クラリッサは何も答えることができなかった、まるで真っ暗な空間を見てしまったかのように彼女の思考は停止していた
　それほどまでに、灯夜の話を聞いてショックを受けていたのだ
　灯夜が他の部隊員たちに連れられているとき、灯夜は基地内の人間

から奇怪なものを見るような目で見られた、きっとさっきの会話を誰かが聞き、広めたのだろう
　灯夜はもとより受け入れられると思ってなどいないため、それほどショックではなかったが、それでもそんな目で見られるのはあまりいい気はしない
　そうこうしていると、灯夜を連れていた女性二人が前方に向かって敬礼をしていたのに気づく、それを見て見よう見まねで敬礼すると、その女性は灯夜の目の前で立ち止まった
　目の前に立ち止まられて少し驚く、しかし、自分の立場はいきなり基地に入って部隊員を殺しかけた人間なので、何も文句は言えなかった
「貴様か、柊灯夜というのは」
「そうだ、俺が柊灯夜だ、で、あんたは？」
　女性は少し表情を曇らせるが、しっかりと灯夜を見据えて話を続ける
「私は織斑千冬と言う、ここでは特別講師として招かれた身でな、なに、取って食おうとしているわけではない、だからその殺気を解いてくれ」
「随分とまぁ、敏感なんだな」
　千冬は灯夜の微量な殺気に気づき、それを注意する
　しかし灯夜はそれに噛みつくかのように睨みつけていた
「一応少し前まで世界最強を争っていた身だ、あまり舐めてくれるなよ？」
「それはわかったが、俺と比べられないくらいの殺気をぶつけてくるのはやめてくれないか？見ろ、横の二人が今にも泣きそうだ」
　灯夜が言った通り、灯夜を連れていた先ほどの女性二人は今にも泣きだしそうな勢いで千冬の殺気に気圧されている、それでいいのかドイツ軍・・・
「ほう？貴様は平気か」
「殺気や死ぬような思いって言うのは慣れているからな、別にあんたの殺気くらいなら平気だ」

灯夜は相も変わらずあっけらかんとした表情で千冬と話すが、千冬はどこか面白くなさそうな顔で灯夜を見つめていた
そんな顔をしている千冬に対して灯夜は別段脅威など感じてはいなかった
「というより、あんたがここの教官って言ってたよな？部隊の人たちに言っておいてくれ、人の部屋に勝手に突入するなって、確かに急に来た俺も悪いとは思っているが、こいつらが来なければ部隊員の女の子を殺しかけることもなかった」
「何？こいつらが突入したのか？貴様の部屋に？話を聞かせてもらおうか？」
千冬にとっては今回の件は、ラウラが勝手に基地に男を連れてきたということだけしか聞かされていなかったので、灯夜から聞かされた件は千冬にとって厳罰すべき対象であり、一時的な教官だとはいえ、誇り高いドイツ軍にあってはならない醜態をさらしたということは到底容認できないものだった
それも重要だが、灯夜が最後に言った言葉に千冬は引っかかった
「では立ち話もなんだからな、どこかスペースはないのか？」
「ふむ、ではそこを少し行ったところに雑談用の休憩スペースがある、そこで話そう」
灯夜はわかったと、相槌を打つと先ほどの女性たちと別れ、千冬と二人でその休憩スペースへ向かった
そこからしばらく歩くと千冬の言う休憩スペースに到着する、雑談用とは聞いていたがその様相はとてもそうは見えなかった、というのも外観があまりにもオシャレなのだ、木組みのカフェモチーフのその場所からは木とコーヒーの素晴らしい匂いが漂っており、その香りを助長するように静かなジャズが聞こえてくる、灯夜はこの基地に来て初めて鼓動が跳ねるのを感じた
灯夜が気に入ったのを感じたのか千冬は機嫌よさげに歩みを再開した
「気に入ってもらえたようで何よりだ、ここは私のお気に入りの場所でな、なにぶんコーヒーの味も良ければ雰囲気も良い、私もここを初

めて見たときは心躍ったものだよ」
「確かに雰囲気も良い、香りを嗅ぐ限り味も相当良いんだな・・・感謝しよう」
　二人はそう言うと椅子に座り、話を始めた
「まず柊、うちの娘たちがすまなかった、そしてお前の境遇が知りたいが良いか？」
「さっきの襲撃の件は焦ったが問題ない、こちらにだって非はある、で境遇の件だが・・・」
　そこから灯夜は本日三度目の自分のことを話した、灯夜自身少し話疲れている部分はあったが、それでも千冬は真剣に聞いた
　そんな千冬を見て灯夜も真剣に話していた
「お前の境遇はわかった、これまで受けてきた苦痛も、だが同情はしない、私には到底理解などできないからな」
「心遣いは感謝する、だが俺の処遇はどうするんだ？あんたの教え子を殺しかけたんだ、ただではすまんだろうに」
「そうだな、普通であれば即刻刑務所行きが妥当だろう」
　その言葉を聞き、顔を曇らせる、もとより救いの道なんて期待していなかった灯夜だったがこうやって面と向かって現実を突きつけられてしまってはもうどうすることもできない
　あの地獄から逃げてきたというのに・・・、死刑にはならないというので死ぬのが目的である灯夜にとってはまさに生き地獄だ
「だが、私はこれをなるべく避けたいと思っている、お前は初めてＩＳを動かした男だ、その事実が公表されれば大混乱が予想される、そして刑務所には送られず一生モルモット生活だろうな、私とて情がないわけではない、だから上と取引をしようと思うんだ」
「取引？」
　灯夜が短く質問すると千冬はニヤッと笑った
「お前はここで働け、私と同じく教官として、そして、シュバルツェ・ハーゼのメンバーとして戦場で戦ってもらう、ドイツにはお前というイレギュラーのＩＳの操縦データを渡す、これでお前にはドイツ軍という後ろ盾ができ、常に死と隣り合わせの空間で生活できる」

「・・・」
灯夜は黙って聞いていたが、その目は大きく見開かれており本人にとって衝撃的だったのは明白だ
「まぁお前に拒否権はない、お前の目的である死ぬ、というのも達成できなくなるからな」
「わかった、わかったよ」
灯夜は参ったという風に両手を上げた、ただその表情は笑っていた
「よし、契約成立だ、これから上に直談判しに行くからお前も来い」
「そんなに上手くいくのか？」
「上手くいかせるんだ、幸い今のところお前のことを知っているのはこの基地の人間だけだ、お前が偶然ＩＳに触れて起動させたとか言っておけばいい、これでも信用はあるほうだ、ただそれでも上手くいかなかった時は・・・」
「時は？」
千冬はなんでもないと言うとそのまま足早に会談用のモニタールームへと向かった

家族

あの後、灯夜と千冬は所長を含めた三人で話をし、ドイツへの直談判を開始した。
『世界最強のＩＳ乗りが緊急の会議があると呼び出すから来てみれば、何故我々を呼んだ？』
『それよりも織斑千冬、横の子供はなんだ？何故そんな子供がそこにいる？』
ドイツ政府の重役たち、彼女らは口々に千冬への質問をするが千冬はどうでもいいといった風にそこに堂々と立っている
「多忙のところ時間を作っていただいて感謝します、勝手ではありますが時間もないため早速本題へ入らせていただきます」
千冬のそんな態度に重役たちは口々にしていた質問を中止し、千冬へ視線を集めた
「先ほども質問にありましたこの男、名前を柊灯夜と言います、この男が何かということですが、先刻、この男がこの基地へ迷い込み、緊急用に展開されていた軍用のＩＳ、ラファールを起動させました」
『なっ・・・!?』
重役の女たちは表情を崩した、彼女たちにとってＩＳは女だけが操れる絶対の力の象徴であり、それが男に操れるとあっては自分たちの権威が地に落ちる、そう感じたのだ
『何かの間違いじゃないのかね？』
「いえ、先ほど私自身も確認いたしました、彼は本当にＩＳを纏える世界初の男性だ、それとも私を疑われますか？」
千冬がそう言うとモニター越しの女たちは再び騒ぎ始めた
「心中お察しいたしますが今日はそのことを報告しに来たのではありません」
『ならば何を言いに来たのだ？』
「この男、柊灯夜をドイツ軍で飼おうという提案です」
『飼うとは具体的にどういうことだ？モルモットにするのは些か勿体ないとは思うが』

重役の一人が千冬の質問に食いついた
「この貴重な男性ＩＳ操縦者、柊灯夜をドイツ軍所属ＩＳ配備特殊部隊シュバルツェ・ハーゼの新人隊員として迎え入れ、そのデータと力をドイツ軍が独占するのです、私はあと数年で日本に戻りますがこのことは口外しないと誓いましょう、世界最強の称号にかけて」
一歩間違えれば千冬も灯夜も殺されかねない危険な道、そんな道を千冬は今正々堂々と真正面からぶつかっている
これが世界最強（ブリュンヒルデ）、これが織斑千冬だと灯夜は痛感した
『・・・』
モニター越しの重役たちの表情は考え詰めていたが、無言の空間から約２０分ほど、灯夜たちからすれば途方もなく長い時間に感じた時は終わる
『いいだろう・・・ただしデータ報告は一週間に必ず一度は行うこと、そして彼がドイツに危害を加えんとするならばミス織斑が責任を取って必ず殺せ、条件は以上だ、データ取得用の機体は後日手配しよう』
「お心遣い痛み入ります、では」
そう言って重役たちを映したモニターは軒並み光を失っていく
「だから言っただろう？上手くいくと」
この日初めて灯夜は女性に憧れを抱いた
「姐さんって呼んでもいいか？」
「あぁ、良いぞ」
灯夜の口からこぼれ出たそんな言葉に千冬は笑って答えた

そのころラウラは灯夜がいるはずの自分の部屋に向かっていた、彼女はつい数分前に灯夜の捕縛報告を聞いたばかりだった、その報告を聞いた時には大事な隊員の胸倉を掴み、居場所がどこかを怒鳴って聞いていた
すっかり腰が立たなくなってしまった隊員を横目に必死で駆け出していた、ラウラ自身何故自分がこんなにも灯夜に必死になっているのか理解ができなかったが、そんな思いを捨て去って今は早く灯夜の

顔が見たい、その思いでラウラは自分の部屋のドアを勢いよく開けた
「あぁ隊長ですか、びっくりしましたよいきなり入ってきて、お楽しみ中だったのに」
　クールな物言いでラウラの枕の匂いを嗅ぎながら自分の髪の毛を拾い集めているのはラウラの右腕とも言うべきシュバルツェ・ハーゼの副隊長であるクラリッサだった
「クラリッサ、お前は何をしているんだ?」
「はっ、私は隊長の毛髪のしゅうしゅ・・・部屋の掃除をしておりました」
　完全に欲望が抑えきれていないクラリッサとそれを汚物を見るような目で見つめているラウラ、その光景は想像よりも遥かにシュールだ
「はぁ・・・ところで、柊灯夜を拘束したと報告を聞いたんだが」
「えぇ、ですがその後解放したんですが・・・どういうわけかどこにも姿がなくて」
　クラリッサは申し訳なさそうにラウラに言う、ラウラ同様の眼帯で覆われた左目と逆の右目からは涙がたまっている
「わかった、私は奴を探す、基地内で歩き回られるのも面倒だからな」
「では私も、ご一緒しましょう、もとはと言えば私の責任ですから」
　そう言って二人が部屋から出ようと、扉を押し開けた時だった
「ん?どうした?そんなに怖い顔をして」
　そこには今まさに探そうとしていた張本人である少年、柊灯夜が立っていた
「お前・・・今までどこにいた!?」
「そんなに怒鳴るな、姐さんと少し話をしていた」
「教官と?」
　ラウラが訝しげに灯夜を見つめる、すると灯夜の後ろから千冬がぬっと顔を出した
「きょッ教官!?」
「ラウラ、お前のそんな顔を見れて私は満足だよ、そんなにこの男のことが気になるのか?まぁいいが、とにかく順を追って説明する」

驚いているラウラをよそに、千冬と灯夜はずけずけと無遠慮にラウラの部屋の中へと入っていく
「さて、説明しよう」
四人は部屋に置かれた小さいテーブルの周りに座り、話始めた
「というわけだ、文句はあるか？」
一通りの説明が終わり、千冬から質疑問答はあるかと聞かれる
「私は何も」
「私は納得できません、教官」
そう言ってキツめに灯夜を見据えるのは隊長であるラウラだ、自分が連れてきたとはいえ一般人を部隊に入れるなどあってはならないのだ
「だろうな、だから急ではあるが柊とボーデヴィッヒにはこれからも模擬戦を行ってもらう、そうすればお互いの実力を分かり合えるだろう、異論は認めん」
「ほう・・・？」
「んなっ・・・本気で言っているのですか教官!?軍人である私と一般人のこいつが模擬戦など！」
「自分が勝つに決まってる、か？安心しろボーデヴィッヒ、こいつは私の殺気を前にしても表情一つ変えない、お前が思ってるよりはやるだろう、それに言ったはずだ、異論は認めないとな」
ラウラはしかし、とまだ反論を続けようとするも千冬の雰囲気がそれを許さなかった
そしてすっかりあきらめたラウラと共に、灯夜たちは模擬戦を行う場所へと向かった

ラウラの部屋から時間にして１０分ほどの場所、体育館のようなその場所はかなり広く、バスケのコートが三つほどある
上を見上げると体育館特有の強い光が灯夜の目を刺激する、あまりのまぶしさに目を瞑ってしまうがすぐに慣れて目を開けられるようになる、そんなありふれた人間らしい行動だが灯夜にとってはまだ生

きているという証明になってしまう
「では双方準備に取り掛かれ、開始は十分後だ」
「私は負けない、部隊を任されたものとして必ずな」
「勝たなければ俺が死ぬ確率が減る、皮肉なものだな」
そう言って二人はそれぞれ準備を始めた

１０分後、上着を脱ぎ、すっかり動きやすくなった二人はお互いに離れた位置に立っていた
「双方準備は整ったな？ではルールを説明する」
「ルール？あるのかそんなもの？」
千冬は当たり前だと言い、続ける
「制限時間は二分、武器は使用禁止、明らかな弱点、股間などを狙うのは禁止、以上だ」
千冬の手にタイマーが握られ、今まさに火ぶたが切られようとしている。
二人の間には空間が少し歪んで見えるほどの緊張が張り詰めており、無駄な動作を許さない
「始めっ!!」
「フッ！」
「シィッ！」
千冬の号令を合図に二人が一気に駆け出す
普段ナイフを主武装としているラウラにとって今回の戦闘は少し不利であるが、今までの経験から問題はないと推測していた
だが灯夜はそんなラウラなんて気にする間もなくスライディングを仕掛ける、だがそれを紙一重でかわすラウラに追撃を入れんと体を跳ね上がらせて浮遊しているラウラの体に拳を入れる
「うぐっ・・・」
ラウラは一発体にもらってしまったことにより苦痛の声を漏らし、着地に失敗する
その隙は逃さないとばかりに灯夜は再びラウラへ拳を振りかざす
しかしそれを待っていたかの如くラウラは灯夜の懐に潜り込み、振

りかざされた腕を掴み、柔道のように灯夜を綺麗に投げた
「甘い！」
「かはッ!?」
　咄嗟のことで受け身が取れなかった灯夜の肺からは空気が押し出され、ラウラは関節技で灯夜を拘束している、これによって灯夜は身動きが取れなくなってしまった
「どうした?私に勝つのであろう?」
「こんなところで！」
　すると灯夜は力任せに腕をラウラごと持ち上げて地面に叩きつけた
「貴様ッ！」
　衝撃で拘束が緩んだ灯夜はすぐにラウラから距離を取った、先ほどのように突っ込んでいけばカウンターを食らう危険がある、そこで一旦距離を取ったのだ
「意外にやるじゃないか、柊灯夜」
「ボーデヴィッヒもさっきのカウンターは素晴らしかった」
　そう言って灯夜は再びラウラに攻撃を仕掛ける
　足を狙って地面に擦らせるように回し蹴るもかわされてしまい、ならばとすぐさま上段蹴りをするもかわされてしまう
　ラウラはその攻撃をかわすと今度は自分のターンだと言わんばかりに灯夜と同じ動きをする、スピードもパワーも段違いのその蹴りに灯夜は対応できずにまともに食らってしまう、二発目の上段が灯夜の脇腹にヒットし、痛さからうずくまってしまう
　チャンスだととどめを刺しに行こうとしたラウラに灯夜の不敵な笑みが聞こえた
「ハハハ!!これ！これだよ！命がすり減っていく感覚！だから戦闘は良いんだ！さぁ！今度は俺のターンだ」
　灯夜は狂ったようにそう言うと今までからは想像もできない、人間なのかと疑うようなスピードでラウラの懐へと侵入した
　低めのアッパーカットの構えを見て防御の体制をとろうとするラウラだが時すでに遅しと言わんばかりに灯夜のアッパーがラウラの

腹へ炸裂する
　衝撃で少し飛んだラウラに対して灯夜は殺す勢いで次々に拳を入れていく
「そこまで!!」
　千冬が大きな声でそう言うと灯夜の拳がぴたりと止まった
　ハッとした灯夜はラウラを見る、鼻からは血が噴き出しており、服の間から見えるおなかはあざのような内出血の跡ができていた
　そして灯夜自身の拳はラウラの吐いた液体や血で塗りつくされていた
「ぁあああああ!!」
　自分がまた人を傷つけた、その事実に灯夜は発狂し気を失ってしまった
「全く、やりすぎだ・・・ボーデヴィッヒを急いで医務室へ！入口付近で見てる隊員(バカ娘)たちにも手伝わせろ！私は柊を見る」
「わかりました教官！そこにいるお前たち！手伝ってくれ！」

　それから約一時間後、灯夜はラウラの部屋の床に横たわっていた、千冬がここに運び込み、外からカギをかけたのだ
　三十分前ほどに目覚めた灯夜は自身がしたことに再び狂乱、嘔吐したが今では落ち着きを取り戻している
「匂い・・・まだ取れない」
　灯夜は自分の手にこびり付いた不快な匂いを嗅ぎながら自分と対峙した女の子、ラウラのことを心配に思っていた
　今灯夜の中にあるのは彼女に対しての謝罪だけだった、そんな灯夜に扉の鍵が外れる音が聞こえた
「柊、入るぞ」
　そう言って入ってきたのは千冬だった、彼女は灯夜の横にあるベッドに腰かけ、まっすぐに灯夜を見ていたが灯夜は顔を背けていた
「ラウラと戦ってみてどうだった？」
「・・・」
　灯夜は答えない

「では質問を変えよう、自分がラウラを殺しそうになった時、どう思った？」
　その質問に灯夜は口を開いた
「怖かった、僕が僕じゃなくなってしまうそうで・・・何か別の化け物になってしまいそうで、それに死にたいっていう僕が他人の命を奪っていくと考えるととてつもなく・・・怖かった」
　灯夜は震えながら質問に答えた、これが彼の本心なのかと千冬はどこかで納得した、そしてまるで小動物のように震えてやまない灯夜を優しく抱きしめた
「それが本当のお前なんだな・・・大丈夫だ、お前は化け物なんかじゃないその証拠に、入ってっこい」
　千冬がそう言って扉のほうに目を向けた、灯夜もつられて見るとそこには先ほどの少女、ラウラが立っていた
「ボーデヴィッヒ・・・？なん、で？」
　灯夜はあの傷では治るのに数週間はかかると考えていたが、現代の医療技術はすさまじく完治とまではいかないものの歩けるまでは回復できていた
「随分としおらしくなったな、柊、これくらいドイツの医学力を駆使すれば造作もない、少し痛むがな」
　そう言ってラウラは自身の腹部を手でさする、そんな仕草に灯夜は申し訳なさで頭がいっぱいだった
「僕っごめ、んボーデヴィッヒに助けられたのに、傷つけた」
「心配ないと言っているだろうに、まぁ、お前を舐めていた私にも責任がある、だからそう謝るな」
　ラウラはそれより、と続けた
「柊灯夜、お前を我が部隊、シュバルツェ・ハーゼの新隊員として迎え入れることにした、お前のその圧倒的なまでの破壊力、そのままではただの暴走機関車だ、よってここで力の使い方を覚えろ、以上だ」
「そういうとこだ柊、お前はもうここの家族だ、しっかり学べ」
「良いの？僕なんかが・・・」
　ラウラは少しイラつきながらも灯夜に近づき、その手で灯夜の頬に

ビンタを食らわせた
「良いか!?柊灯夜!私はお前が必要だと思ったからこの部隊に入隊するのを許可したんだ!それなのに僕なんかとはなんだ!さっき教官が言った通りお前はもう私たちの家族だ!お前をバカにするやつらは私が決して許さない!たとえお前自身であってもだ!わかったな!」
「・・・わかった、これからよろしく・・・隊長」
「ラウラでいい、その代わり私も灯夜と呼ばせてもらう」
灯夜はもちろん、と言うと他の部隊員が待つ食堂へと向かった
新しい家族と共に

水面下

灯夜の部隊入りが決定した翌日、シュバルツェ・ハーゼの面々は基地のロビーに集まっていた、それぞれが内に秘めた思いを口に出すことはなく、今はただ一人の軍人として一切の乱れもなく綺麗に整列していた

そしてその静寂な空間に足音がひとつ聞こえてくる

「おはよう諸君、早速だが諸君らに報告がある、先日部隊長のラウラ・ボーデヴィッヒが男を連れてきたという件だが・・・件の男、柊灯夜をシュバルツェ・ハーゼのメンバーに参入させることが決定した、知っている者も多いと思うが柊は男にしてＩＳを動かした」

千冬のその言葉に静寂だったロビーにざわつきが生まれ始めた、知ってるものが多いとはいえ女にしか動かさせないはずのＩＳを男が動かしたというにわかに信じがたい情報を自分たちが慕っている教官から直接言われるのだから当然だろう

「静かにしろ、異を唱える者は後で私の部屋に来い、一応これは部隊長の判断でもある」

千冬がそう言うと後ろからラウラが千冬と変わり、話始めた

「今教官から言われたとおりだ、現に私は彼に負けてしまった、だがあの力は私たちとは違う、脆くて弱いいつ壊れてもおかしくないような力だ、だからお前たちの力を借りたい、どうか彼を、灯夜を、助けてやってほしい」

今までのラウラからは考えられないような行動、彼女が会ったばかりの、しかも男のために頭を下げる姿なんて部隊員たちは想像できなかった

だからこそ説得力があったのだ

「隊長、我々黒ウサギ隊は隊長について行きます」

そう言い放ったのは他でもないクラリッサだった、それに続くように他の隊員たちも拍手を始める

「ありがとう・・・私は、素晴らしい部下たちに囲まれているのだな・・・」

ラウラは少し涙ぐみ、しみじみとそう言った

この時は初めて彼女は部下たちと心を通わせ合った
「では最後に本人に出てきてもらおう、入ってくれ」
「あー、入りにくいなこれ・・・」
少し照れたように頭を掻きながら入ってくるのは渦中の少年である灯夜だ
「まずは感謝を、姐さん、ラウラ隊長、そして黒ウサギ隊、俺は昨日ラウラに命を救われた、日本人として恩は返そうと思っている、だから・・・」
灯夜は緊張しているのかどこか歯切れが悪い
「ダメだな・・・素直に言おう、俺は少し人というものに恐怖を感じている、俺の生い立ちはおそらく知れ渡っているだろう、だから詳細は省くが俺は過去の経験からあまり人に好かれるような態度はとらないと思う、もしかしたら昨日ラウラにしたように殺しかけることもあるかもしれない」
「だからどうした?」
灯夜が暗い空気でそう言うも、その他の隊員たちはあっけらかんとしている
彼女たちにとって危険とは日常であり、死とは隣人のような関係だ、灯夜が危険であろうが今さらなのである
「そうか・・お前たちにとって俺はただの赤子同然か、ならいい、たった今から俺はドイツ軍所属ＩＳ特殊配備部隊シュバルツェ・ハーゼのメンバーだ!よろしく頼む」
灯夜がそう言うとロビー内は拍手と共に暖かい空気に包まれた、その光景にあの頃を思い出した灯夜は少し物悲しくなった
「話はまとまったな!では早速午前九時より訓練を始める!遅れたバカは外周１０週だ!」
「はい!!」
ここから灯夜の新しい生活が始まる・・・

～亡国機業ｓｉｄｅ～

「あの子の位置はまだ追えないの!?」
　某国のとあるビル、そこにはベッドに横たわった包帯まみれのスコールが申し訳なさそうに立っている男に対して怒号を浴びせている、普段は美しい顔が今では苦痛と怒りで歪んでいる
「申し訳ございませんスコール様、彼の体にＩＳコアを埋め込んでいる以上コアネットワークで追えると確信しているのですが・・・依然姿どころか影さえ追えず・・・」
　男はどんどん委縮していき、だんだんと声も萎んでいく
　灯夜が亡国機業からの脱出に成功したとき、同時に謎の無人ＩＳが何十体も現れスコールたちを追い詰めたが必死で逃げ、今は隠れ家の一つで治療をしながら灯夜の居場所を探していた
　しかし、灯夜に埋め込まれたＩＳの轟絶鬼はコアネットワーク外の存在のためコアネットワークでは捜索ができない、それに気づいていない亡国機業はまさに無駄なことしかしていないのだ
「使えないゴミはいらないのよ!あの子がいないとこれからのデータが取れないじゃない!私の計画が・・・!!」
　スコールは前の冷静さをすべて欠いて感情のみで動いていた、その姿はまるで獣だ
「世界中の監視カメラへのアクセスを試みていますがまるで何者かにブロックされているようにことごとく失敗しております、ここはひとつ期間を置いたほうが・・・ッグ!?」
　男が捜索中止の提案をするとスコールはＩＳを展開し、竜の尻尾のような武装で男を締め上げた、締め上げられた男は苦痛の表情を露わにし口からは血が少し溢れている、しかも体からは人から到底鳴ってはいけないような音が鳴ってしまっている
「いい?私は今機嫌がすこぶる悪いの、期間を置くなんて冗談じゃないわ!どんな手を使ってでもあの子を見つけなさい!これは命令よ!」
「・・・ッグァ、わかりました」
　男は乱雑に床に降ろされると苦悶の声を漏らしながら部屋から去っていった

男と入れ違いに女性が一人、スコールのいる部屋に入ってくる
「オータム・・・どうしたの？悪いけどこんな体じゃお相手はできないわよ？」
「・・・スコール」
オータムは顔を下に向けたまま弱弱しく呟く
「なぁ、なんであのガキに・・・灯夜にそこまでこだわるんだ？ほかに実験体なんていくらでもいるじゃねぇか・・・なのになんで？」
「なに？妬いてるのオータム？」
「・・・答えてくれ」
オータムは少し強く催促した、オータムのいつもとは少し違う雰囲気に答えることにした
「そうね・・・まぁ単純に言うならあの子がお気に入りだからよ、私はね・・・あの子の目に惹かれたのよ」
「目・・・？」
「そうよ、あの子の希望を失った・・・この世のすべてに絶望したようなあの目・・・あぁ、思い出しただけでも体が火照ってきてしまうわ」
スコールは包帯まみれの体をもじもじさせ、その顔はどこか恍惚としている
「そうか・・・スコールは変わっちまったんだな・・・」
そんなオータムの呟きはスコールに伝わることはなかった
少しふらつきながらもオータムは部屋を後にするのだった

ｓｉｄｅｏｕｔ

～束ｓｉｄｅ～
「さぁて？向こう側の監視カメラのハッキング対策もバッチリだ～！あとはとーくんを探すだけなんだけど・・・なかなかうまくはいかないよねぇ～」
一度寝たのか、束の目の下の隈はすっかり姿を消しており、血色のよくなった顔はやはり美少女だ
しかしそんな事実を評価する人間がいない潜水艇内では彼女の独

り言とコンピューターや機械の音だけが響いている
　そんな環境にすっかり慣れてしまった束は気にすることなく再びパソコンの前に座り、作業を再開する
「監視カメラの映像は調べつくしたし・・・とはいってもこれだけ時間が経っているのなら波打ち際の捜索も多分意味がない・・・としたらもう保護されてる・・・？それにとーくんが万が一ＩＳを動かしちゃったら・・・あわわ、こりゃ大変だ～!!急いでこっちで保護してあげないととーくんがまた逆戻りになっちゃうよ～」
　束にしては珍しく慌てながらパソコンを操作していく、そもそも何故束は灯夜に対してここまでするのだろうか
「あの時のお礼もまだだしね～早く会っていろいろお話がしたいなぁ」

　今でも束にとっては昨日のことに思い出せる
　それは約二年前、灯夜のいた柊孤児院が火事になる前のこと
　その時束は今のように潜水艇に身を隠すことなく自分なら追ってくらいどうとでもなると過信し、表を堂々と歩いていた
　その自信が仇となったのか束はミスを犯し、足に深手を負ってしまった
「くっ!?あいつら・・・よくもやってくれたな、でもこの傷じゃ遠くまでは逃げられないしなぁ」
「ん?お姉ちゃんどうしたの?」
　そこにいたのは幼少期の灯夜だった、灯夜は院長との買い物帰りの途中で壁にもたれかかる束を見て声をかけた
「私は何ともないからどっかに消えて」
「嘘、だってお姉ちゃん、血が出てるよ?この近くに僕の家があるから来て、手当するから」
　束は呼吸も乱れていなければ血が出ているのは服で隠してある部分だったため、血が出ているとは灯夜からはわからないはずだったのに、なぜか灯夜は束の状態を見抜いて、無理やり手を引いて柊孤児院まで連れて行こうとした

「ちょっと！消えてって言ってるの！」
「ダメ！痛いのはつらいでしょ！」
「あら、灯夜くん、どこ行ってたの？それにその人は？」
　院長は姿が見えなかった灯夜を見つけると灯夜が珍しく意地を張っているのを見て少し笑い事情を聞いた
「事情は分かったわ・・・じゃあ家まで連れて行きましょうか」
「だから行かないって言ってるだろうが！いい加減に・・・ヒッ!?」
「いい加減に・・・何ですか？」
　その瞬間束は味わったことのない恐怖を目にした、院長と呼ばれるこの女性からあふれ出るオーラが自分の意見をすべて潰してしまう
　そのオーラに取り巻かれた束は仕方なく付いていくことにした
「ここです、ようこそ柊孤児院へ、早速ですが治療をしますのでこちらへ」
「先生、僕も・・・」
「灯夜くんは優斗くんと遊んでらっしゃい、この子とは後で話せばいいわ」
　灯夜はわかった、と言うと広場に向かった
「さて、行きましょうか、篠ノ之束さん」
「やっぱり気づいてたんだ・・・でどうするの？政府にでも差し出す？」
　束はもうおしまいだと言わんばかりに落ち込んだ、当然だろう、一度世界から逃げようとした自分が再び捕まればもう人としての扱いを受けないかもしれない、『宇宙へ行くためのパワードスーツ』であるＩＳを軍事利用しようとするクソ野郎たちのために一生・・・
「何を言っているのかわからないけど、私は貴女を差し出すつもりはありませんよ・・・私は灯夜くんと約束しましたからね、この子とは後でねって、だからとにかく医務室へ行きましょう、可愛い洋服に血が染み込んでしまいます」
「・・・ッ!?わかった」
　その後院長と束は治療を受けながら少し話した、話を聞くと彼女は元戦場医師だったそうだ、医師であるのにもかかわらず時には人の命を奪わなければならないという現実に耐え切れずに辞職したらしい、

他の職員たちも似たような理由で軍をやめた者たちばかりだという
「はい、とりあえずこれで終わりです、しばらく安静にしていれば以前のように動かせるでしょう」
「・・・ありがとう」
「お礼なら灯夜くんに言ってください・・・さぁ、あの子のところに行ってきてください」
　束は医務室から出ると灯夜のところに向かおうとしたが、窓の向こうに束の追手が来ていることに気づいて結局お礼は言えないまま孤児院から抜け出してしまった。
「思えばあのときに私があそこに行っちゃったから放火されたのかな・・・」
　束は一瞬キーボードを打つのを止めたが、数秒もすると再びカタカタとキーボードを打ち始めた
「絶対に見つけるからね！とーくん！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

一幕

灯夜の部隊入隊の挨拶とその後の訓練が終わって、日が沈む時刻になり灯夜を含めた黒ウサギ隊の面々は食堂へと向かっていた

灯夜と千冬が話していたカフェエリアからほど近い場所にある食堂には日々の訓練で疲れた兵士たちへの栄養配分が申し分なくされている

それに加えて和、洋、中華、もちろんドイツの郷土料理などを含めた数多くの品が列を並べている、どの料理も香ばしい香りがし、食欲をそそる

「ほぉ・・・これは圧巻だな」

「ん?あぁそういえば灯夜はここに来るのは初めてだったな、では私が案内しよう」

「良いのか?隊長直々に案内してもらうなど新人にしてはおこがましいと思うのだが・・・」

「ラウラと呼べと言っているだろうに・・・まぁいい、新人の面倒を見るのは隊長の務めだからな、気にするな」

ラウラはそう言うと早速カウンターに並んだ、それに連れられて灯夜も同じ列に並ぶ、どうやらここは日本食のコーナーらしい、ラウラなりに気を使ったつもりなのだろう、こういう気づかいはさすが一部隊の隊長だということを自覚させられる

灯夜たちの順番になると数々の品物が目に入った、だが事前にメニュー表をもらっていたのでそこまで悩むこともなく料理を選んだ、灯夜が選んだのは筑前煮に味噌汁と白米、日本食らしいセットとなった

「うむ、やはり灯夜は筑前煮にしたか、ここの料理はすべて美味いからな、ハズレはないがその筑前煮は特に美味いぞ」

「そうか、まぁ昔よく院長先生が作ってくれたものでな、少し思い出して注文してしまった」

灯夜とラウラはそう言うと少し離れた対面式の窓際の席に座った、あとから聞いた話だとここはラウラ専用の席らしくそこに招待され

た灯夜を見てどこかの副隊長が血涙を流しそうになったという
　二人は席に座りそれぞれの料理を食べ始めた
「(あれ・・・この味は)」
　灯夜が筑前煮を食べるとなぜか懐かしい味がした、忘れもしない幸せだったあの頃の院長先生が作ってくれた筑前煮だ
　何故ドイツという異国でこの味が食べれるのか灯夜はわからなかったがとにかく懐かしいその味に灯夜は涙を流した
「どうした灯夜!?そんなにここの料理が不味かったか!?待ってろ今すぐ替えの料理を持ってくる!」
「大丈夫だ・・・あぁ、少し懐かしくてな、俺が前住んでいた孤児院の筑前煮と同じ味がしたんだ、それで少し泣いてしまった・・・ダメだな、泣きっぽい性格直さないと」
　ラウラの騒ぎに何事かと周りに集まった他の隊員も灯夜に奇怪の目を向けていた
「あーすまん、何でもないんだ驚かせて悪かった」
「なーんだ、隊長が柊君泣かせたのかと思った・・・あ、私ロニエねよろしくー」
「ホントに隊長は隊員を困惑させるのが好きなんですから・・・シオンです、よろしく」
　そこからなぜか自己紹介ムードになったのか次々と他のメンバーたちから自己紹介される
「あぁ、よろしく頼む、全員一気に覚えられる気はしないから間違えるかもしれないがそのあたりは勘弁してくれ」
　一通り自己紹介が終わり、皆それぞれ席に帰っていく
　その眼前、灯夜が自己紹介のマシンガントークに撃ち続けられていた時からラウラはどこか不満げな表情で料理を口へ運んでいた
　ラウラ自身ですら不満げにしている理由がわからないまま料理を食べ終えてしまう
「(全く、隊員同士仲良くするのはいいことだが・・・なんなのだこの気持ちは、どこか、もどかしい)」
　すっかり冷えてしまった食器をカウンターへ返却しながらラウラ

は自身の変化に戸惑うのであった
「そこにいたか」
　ほどなくして後ろから灯夜の声が聞こえた
「なんだ、自己紹介は終わったのか？」
「あぁ、一応な正直覚えられる気がせん、あと少し話があるから部屋に行っていいだろうか？」
「構わんが・・・何の話だ？」
「なんでお前が俺に見覚えがあるのかって話だ」
　灯夜は昨日ラウラに助けられてからラウラが言った見覚えがあるという言葉が少し引っかかっていた
　そうこうしているうちにラウラの部屋へと到着した
「さて、どうして私が灯夜に見覚えがあるのか、という話だったな」
「そうだ、それで俺はひとつ仮説を立ててみた」
「仮説？」
「あぁ、俺は二年前、奴隷商に捕まえられて奴隷として売られた、ここは昨日話した通りだ、その船の中でな、お前と似たような女の子に会ったんだよ」
　思い出されるのは二年前、あの奴隷船に乗せられていたとき自分に話しかけてくれた銀髪の少女だ
「その女と私に何の関係があるというのだ？」
「確認するがお前らは遺伝子強化試験体（アドヴァンスド）だったな？」
「あぁ、私たちは鉄の子宮で生まれた、故に過去もない」
「それだよ、お前が遺伝子強化試験体（アドヴァンスド）なら、元になった人間の遺伝子があるハズなんだ、そこで俺の仮説だがおそらく俺が出会ったあの女の子、あの子がお前の遺伝子の元になってる人間だと思う、胸糞悪い話だがな、推測だがお前の中の女の子の遺伝子が俺を覚えてということかもしれん」
　少しの沈黙が流れる、温かみのない白色の蛍光灯がやけに寒々しく感じて腕を少し擦ってしまう
　ふとラウラのほうを見ると自分の胸に手を当てながらどこか考え込んだ表情で灯夜を見つめていた

見つめられた灯夜は少し恥ずかしくて目を逸らした
「まぁ俺の仮説はこんなものだ、これが本当かわからないし何で俺に見覚えがあったのか根本的な説明もできない、だがこういう可能性もあるんだということを共有しておきたかった」
「・・・あぁ、今日はありがとう、もう部屋に戻れ」
そう言われると灯夜は少し申し訳なさそうにラウラの部屋を後にした
灯夜が出て行ったあと、ラウラは一人で何かをぶつぶつとつぶやいている
「私は・・・私は一体誰なんだ・・・？」
孤独なウサギの呟きは誰の耳に届くわけもなくただ冷たい部屋に反響した

感想ください

幕間

ある日、珍しく休みをもらった灯夜は近くの商店街のような場所に来ていた

通りにはたくさんの店が景気よく立ち並んでおり飲食店に雑貨屋、食材を売っている店などとにかく種類が多い

灯夜がこんな繁華街に来たのには訳がある

「姐さんに金を渡されたのはいいが・・・どんな服を買えばいいのだろうか・・・？昔は下着以外基本的に配給された中古の服をもらっていたからな、いかんせんファッションがわからん・・・言葉も通じるかすら怪しい、せめて黒ウサギ隊の誰かについてきてもらうべきだったか？」

そう、ここドイツに来て（漂着して）一か月ほど灯夜は服を買っていなかったのだ、今までは仕方なく作業着や支給されたＩＳスーツなどでなんとかやっていたが

そろそろ冬が来る、よって千冬に政府からの給料だと言われ渡されていた金で服を買いに来たのだ

その額、日本円にして約五十万ほど

しかし金の価値などあまりわかっていない灯夜からすればこれで足りるのかという不安しかなかった

「さて・・・まずは上着から、ん？」

灯夜は服屋が少し密集している場所で服を買おうとしたところでどこかで見た影を見かけた

「あー！灯夜じゃん!!こんなとこで何してんの？いつもは基地に引きこもって筋トレばっかりしてるのに」

「こらロニエ、急に街中で叫んじゃダメでしょ？って灯夜さんじゃないですか！どうしたんですか今日は？」

灯夜が影を追い店に入るとそこには黒ウサギ隊のメンバーであるロニエとシオンがいた、二人はいつもの軍服とは違い年頃の女の子らしい可愛らしい服装だった

ロニエはオーバーサイズのパーカーに短めのジーンズのラフな服

装だった
シオンはロニエとは対照的にオフショルダーニットにスキニージーンズという少し大人っぽい魅力がある服装だった
そんな二人を見て灯夜はあることを思いついた
「ロニエ、シオン、よかったら俺の服を選んでくれないか？無理にとは言わないしもし受けてくれたら何かご馳走しよう」
「え!?ホント!?私は灯夜の料理が食べれるんだったら良いよ？シオンは？」
「私も大丈夫ですよ？灯夜さんのご飯食べたいですし」
灯夜は黒ウサギ隊の基地にやってきてから与えられるばかりは嫌だと自分から黒ウサギ隊のメンバーへ料理を振舞っている、最初こそあまりいい味とは言えなかったが、食堂の料理担当の人たちに料理を教わりながら、メキメキとその腕を上げて行っている
「俺の料理ごときで良いのなら頼む・・・」
灯夜は申し訳なさそうに二人に頭を下げるが二人はそんなことないと言って灯夜と共に男物の服が置いてある店へ入っていった

灯夜を含めた三人は他の店に比べると少し大きめの店へ入ってきた
中には数々の服が並べられており、文字と共に看板がでかでかと壁に貼られているが灯夜には到底読めなかった
「さて、灯夜はまずどんな服を着たい？」
「灯夜さんの要望に合わせて私たちが服を適当に持ってくるので、灯夜さんは着せ替え人形になったつもりでいてくださいね？」
「頼んでいるのはこっちなんだ、文句も何も言えんよ」
そうして灯夜は二人に要望を伝えて店内にある小休憩スペースに座り、さっき買ってきたコーヒーの蓋を開ける、プシュッという空気が抜ける音と共にコーヒーの苦くも香しい香りが鼻孔ををくすぐる
ここドイツに来てから千冬が灯夜の前で美味しそうにコーヒーを飲む姿を見て灯夜も飲み始めたのだが、どうにもはまったらしく今では自室のコーヒーセットで豆を煎るところから始めるほどこだわり

が強くなっていた
　コーヒー缶からひとしきり香りが出るとそれを少しずつ喉に流しこんでいく、鼻から抜ける香りが再び灯夜の鼻孔を優しく撫でる
　そんな至福の時間を過ごしていると不意に耳元に蚊の羽音が聞こえた、反射神経に物を言わせて片手で蚊を掴むと普通の蚊と比べてどこか堅かったので手のひらを見るとそこには煙を上げて体のパーツを粉々にされたメカニカルな蚊が死んでいた
　灯夜は少し戸惑いながらも飲み干した缶コーヒーと共にゴミ箱に捨てたが、缶に残っていたコーヒーに沈んでいく蚊の目が灯夜をずっと見つめているようでとても不気味だった
「おまたせ!何着か持ってきたから早速試着を・・・って何してんの灯夜?ゴミ箱なんてじっと見て、なんかあんの?」
　服選びから戻ったロニエに呼び止められてハッとする灯夜だったが、すぐに気を取り戻した
「ありがとう、さてシオンが戻ってきたら試着室に向かおう、見たところたくさん選んでくれたみたいだからな」
「あ、うん・・・シオンならもうすぐ来るから座っとこ?」
　そうやってロニエと灯夜はすぐそこの椅子に座り最近の近況について話始めた、ほどなくしてシオンが合流し三人そろって試着室に向かった

　～束ｓｉｄｅ～
「だぁ～!!どこにいるのさとーくん!!」
　束が灯夜の捜索を開始して早一か月、天災と恐れられる束でも灯夜の現在位置を特定するのに四苦八苦していた
　灯夜が身を投げた亡国機業の基地だった島からの海流を計算し、彼がドイツにいる可能性が高いのを突き止めたまでは良いのだがどうしてもそこから監視カメラの映像だけでは探しきれないと判断してカメラを搭載した小型メカをドイツ各地に飛ばしたもののいまだに成果がない
「束様、パンが焼きあがりましたのでご一緒にどうですか?」

不意にだらんとしている束の後ろから声が聞こえる、扉の奥にいるであろう彼女は先日束が灯夜を探し回っている最中に発見した少女である
重々しい扉が見た目に反して軽々と電子音を上げながら開く、すると焼きたてであろうパンの香りと共に束の前に件の少女が目に入る
銀髪の美しい髪に束が趣味で着せたであろうゴスロリ風の服、そして瞑られた目、どこか儚げな彼女に束はクロエ・クロニクルと名付け、今はともにこの潜水艇で過ごしてる
「クーちゃんおっはよー!わーおすごい良い匂いだねぇ!クーちゃんが作ってくれたの!?嬉しいなぁ〜!」
「はい、束様が使っていなかった機械を使わせていただきました、味は保証しますよ?」
クロエはそのまま白いテーブルに束を座らせ、自身もその席に座り束と共に食事を楽しむ
まるで不思議の国のアリスの物語、その一幕に登場するお茶会を彷彿とさせるその光景はどこまでも幻想的で美しく、思わず息を飲んでしまう
「やっぱりクーちゃんが作ってくれたパンは美味しいね〜!元気がみなぎってくるよ〜!」
「それはよかったです・・・最近束様はずっとパソコンの前にいましたから少しでも元気が出ればと思って、せっかくですからお風呂も入ってしまってはどうでしょうか?」
「クーちゃんは優しいねぇ・・・ママ泣いちゃいそうだよ、ぐすん」
束は目元の涙を拭う仕草をするとパンをまた食べ始める、とても幸せな表情でこの世の幸福という感情をもかみしめているかのようだ
そんな瞬間を噛みしめていると束のパソコンに一通の通知が来る、微量な音だったにもかかわらず束は人間離れしたスピードでパソコンへと戻り、その通知を確認した
「やっと、見つけた・・・見つけたよ!とーくん!」
「見つかったのですか!?」
束がパソコンを操作すると潜水艇内のありとあらゆるモニター画

面に灯夜の顔が映し出される、あの島の崖で一瞬だけ見えた色が抜け落ちたかのような白髪、そして人を殺しそうな鋭い目つき、そしてその下には人体実験のストレスからか濃い隈が痕になって染み込んでいる

早速束は情報が送られてきた小型メカの位置情報を割り出し始めた、そしてやはり灯夜はドイツにいたのだった

「クーちゃん、とーくんを迎えに行ってあげてくれないかな？」

「かしこまりました、ですが良いのですか？束様が行ったほうが・・・」

ふとクロエが束のほうを見るとパソコンを操作しながら先ほどとは違う芋虫を噛み潰したような顔で画面を睨みつけている束の顔が目に入った、その顔を見てクロエは少し委縮してしまう

「あ、ごめんねクーちゃん・・・実は今のカメラの映像、とーくんに壊されちゃったからか電波が漏洩しちゃったみたいでね～亡国機業（ゴミ共）が位置情報を掴んじゃったみたい、だから私はここでなるべくとーくんの情報を乱して奴らを捲いておくからそのうちにとーくんをお願い」

「わかりました、灯夜様は必ず連れてきますので」

束は短くお願い、とだけ言うともとの作業に戻り、クロエも身支度をするために部屋から一旦退出し自身の部屋へ足を運ぶのだった

～亡国機業ｓｉｄｅ～

「失礼します、スコール様」

「あら、どうしたのかしら？」

以前スコールは包帯が醜く目立つ状態でベッドに縛り付けられていたのだが何故かたった一か月程度で復活し、今はデスクで一人書類整理をしていた

「それが・・・先刻ドイツ国内から異様に乱れた電波信号が発生してしまして、その信号を受信、解読しましたところこんな映像が流れてきまして・・・」

「映像・・・？」

端末を渡されたスコールは再生された映像を見て脳が揺れるよう

な衝撃に襲われた
　再生された映像に映っていたのはスコールが探し求めていた少年、灯夜だった
「急いでドイツへの出撃準備に取り掛かりなさい、そしてその映像の具体的な位置の特定を急いでちょうだい・・・」
「はっ、しかし周りにはドイツ軍基地も多数点在していますのでうかつには侵入できないかと」
「いい?私は急いでと言ったの、二度は言わせないで」
　部下らしき人間はスコールの雰囲気に半ば委縮しながら部屋を後にする
「灯夜くん・・・必ず見つけてみせるから・・・今度こそ完全に私のモノにしてあげるわ」
　スコールは艶やかにそう言い放つと火照った体を冷ますように月の下に身をさらす・・・その顔にもはや理性というものはなかった

　感想やお気に入りにしてくださっている方々、本当にありがとうございます
　傲慢かもしれませんがもっと感想などくださるとモチベーション向上につながりますので感想ください

Ａｂｏｕｔ　ｍｅ

ドイツのとある洋服店、そこでは現在謎の人だかりができている、ある一点を囲うようにして目線が集中している先には一つの試着ルームがありあそらく中の人物からすれば動物園のパンダにでもなった気分だろう

ほどなくして渦中の試着ルームから一人の男性が出てくる、現在女尊男卑が進む世界であるがゆえにこういう光景を見るのはとても珍しいことでありそれほどまでに渦中の人物が人を惹きつけるのは確かであった

「ふむ、なかなか良いな・・・気に入った、これなら冬も暖かそうだ」

渦中の少年、灯夜はシオンから選んでもらった服を試着しているところだった、シオンが選んだのは少し青みを帯びたカッターシャツにグレーのベスト、白く裏地が黒のコート、ズボンは黒のスラっとしたスキニー、そしてブラウンのオーバーストールとかなり大人っぽい服だった

灯夜たちを遠くから囲っている周りの女性たちは目にハートを浮かべながら目の前のエサ(男)に食らいつくハイエナのような目をしていたがロニエとシオン、そしてわずかばかり理性が残っている他の店員たちに圧をかけられとどまっている

「気に入ってもらえたのなら何よりです、灯夜さんは年齢に比べてかなり大人っぽいですのでこういう服装も似合うかなと思ったのですが、ばっちりですね！」

シオンはおとなしくも嬉しそうに両手を合わせてほほ笑んだ、一生懸命選んでくれた上にここまで喜んでくれると不思議とこちらも心地いい

だが忘れがちだが灯夜の感情の一部は欠落していて、轟絶鬼(とどろき)がそれを補ってくれている、その事実は消えておらず灯夜はどこかでこの感情は自分のモノではないのだろうかと頭を悩ませてしまう、そんな考えを振り払うように隣で一緒に灯夜を見ていたロニエに声をかけられた

「灯夜！次は私が選んだ服着てみてよ！こっちも自信あるんだからさ～！」
「わかった！わかったから少し待て！」
そう言って灯夜は服を押し付けられ、そのまま再び試着ルームへと押し付けられる、普段クールな灯夜が慣れない状況にあたふたしているのを見てロニエとシオンの二人は笑い合った
次に灯夜が出てきたときに着ていた服は先ほどの大人っぽいクールな感じとは正反対で、男らしいワイルドな服だった
前閉めのパーカーの上には黒の革ジャケット、そしてズボンはダメージジーンズでロニエが好きそうな若者風ファッションだった
先ほどとは違うワイルドで男らしい服装でロニエとシオン含めた周りの女性たちはおぉ～と感嘆の声を漏らした
「やだ・・・私のコーデ、似合いすぎ!?」
「ロニエ、クラリッサさんから教えてもらったネタで会話しようとするんじゃないの」
二人が漫才のようなやり取りを続けているとき、灯夜は革の材質や動きやすさを確認していた
「「で灯夜（さん）どっちの服にするの？（しますか？）」」
一通り漫才が終わったのか二人は灯夜に詰めよった、はたから見れば美人二人に詰め寄られているこの状況、見る人が違えばとんだ修羅場だ
「俺はどちらも気に入ったし金もあるから両方買うことにする、せっかく選んでくれたことだからな」
そう言って灯夜はレジへと足を運び、会計を済ませた
（余談だが、レジに行くもドイツ語があまりわからずにロニエとシオンに助けてもらっていた）
その後店を出た三人は近くのカフェでくつろいでいた、店内はとても静かで基地内の喧騒を忘れさせてくれるものがあった
灯夜はコーヒーを、ロニエはカフェオレ、シオンはオレンジジュースをそれぞれ注文した
初めて外で缶コーヒー以外のコーヒーを飲むので少し期待に胸を

弾ませながら三人で談笑していた
「そういえば灯夜ってさ～隊長とどうなの？」
「どうって？」
　ロニエがまたまた～というが灯夜はなんの覚えもないという風に話している
「いやぁ最初に隊長が灯夜連れてきたときは驚いたのなんのってねぇ？」
「そうなのか？」
「そうですね・・・隊長は昔から男の気が微塵もなかったものですからあの時は大騒ぎでしたよ、特に副隊長・・・クラリッサさんは驚いていたというか、血涙を流しそうな勢いでしたからね・・・」
　シオンがしみじみとそう言うと店の奥からコーヒーの渋い香りが漂ってくる、そろそろ来ると思い奥から運ばれてきた飲み物をウェイトレスから受け取る
「にしても灯夜ってホントにコーヒー好きだよねぇ・・・部屋の中匂いすごいもん」
「確かに、なんでそんなにハマったんですか？」
　灯夜は飲みかけたコーヒーを一旦小皿に戻し、質問に答えた
「そうだな、はじめは姐さん・・・織斑教官が飲んでいるのを見て美味しそうと思ったんだ、だが飲んでみると大間違い、思いのほか苦くてなそれで自分に合うコーヒーを作ろうと思って所長に冗談半分でキットを貸してほしいと言ったら基地の備品をくれたんだ、まさかもらえるとは思っていなかったが貰ったのだからとことんまでやってみようと思ったわけだ」
　少し長々と話してしまったと心の中で反省する灯夜だったがそんなことは気にしていないと言わんばかりに二人はじっと灯夜の話を聞いていた
「なんというか、前々から思ってたんだけど灯夜ってすごく真面目だよね、私だったら三日と続かないよ」
「そうですね、灯夜さんトレーニングも休まないし訓練だっていつも一番初めに来て掃除と準備運動済ませてますしね」

「おかげで私たちはちょっと楽できてるけど心配になるよ？」
「心配をかけてすまない・・・でも俺は拾われた身だ、そんな俺がお前たちやドイツに返せるものと言ったら日々のデータと家事をすることくらいだ、だからそんなに心配しないでくれ、これは俺なりの恩返しだから」
　灯夜はそう言って二人を説得すると納得したかのように飲み物を飲み始めた
　しばらくして飲み物をあらかた飲んだ三人は会計を済ませて外に出ていた、時刻は四時を回っていたので三人は灯夜が今夜作る料理の食材を買った後基地へと戻った

「失礼します隊長、お呼びでしょうか？」
　黒ウサギ隊の基地内、ラウラの部屋に呼ばれたクラリッサは若干期待に胸を膨らませながらラウラの部屋へと入っていく
　そこにはいつものラウラはおらず、どこか虚ろ気な抜け殻のような少女がひとりいるだけだった
「隊長・・・？」
「あぁ、クラリッサか突然呼んでしまってすまない・・・相談があるんだ」
　いつもの様子とは違うラウラに若干戸惑いながらもクラリッサはラウラと目線を合わせて座り、話を聞く
「最近少しいろいろと考えることがあってな、その中で私から出た疑問なんだが・・・私は一体誰なんだ？」
「は・・・？」
　クラリッサは自分から出た間抜けな声に恥ずかしさを隠せなかったがそれ以上にラウラから出た疑問に驚きを隠せないでいた
自分を見失っている、なぜかはわからないがあのラウラ・ボーデヴィッヒが、誇り高い黒ウサギ隊の隊長が完全に自分を見失っていた
　ラウラが元から少し脆い部分があると考えていたクラリッサだったがここまで崩れてしまうとは予想外だった
「私は自分が誰かわからなくなってしまったんだ・・・灯夜から私が私

の元となった人間の意志が残っている可能性があると言われた、それだけならよかった、しかしそれを言われたとき思ったんだ、私は一体誰なんだろうとな、教官のように強くなりたかった、ただ強く誇り高く、だがその先に私はいるのか?教官のようになったとして、私は消えてなくなってしまうのではないか?そんな思いが頭の中をぐるぐる回っているんだ」

「あなたは・・・あなたはラウラ・ボーデヴィッヒです、他ならないこの黒ウサギ隊のリーダーです、どうか気を確かに」

気休め程度にもならないと自覚しながらもそんな無責任な言葉をラウラにかけた、きっとクラリッサではだめなのだろう、そんな自身の無力さに嘆きながらもクラリッサは部屋を後にした

「さてと、作るとするか」

灯夜はエプロンなどは付けずにそのまま料理を作り始める

「おーやってるねー今日はなに作るの?」

「今日はそうだな・・・卵丼だな」

灯夜はそう言うと続々と冷蔵庫や買い物袋から材料を取り出し始めた

「ロニエ、悪いがあの四人組と隊長とクラリッサを呼んできてくれ、どうせならみんなで一緒に食べよう」

「わかった~!」

ロニエは元気よく返事をして食堂から出ていくと灯夜は調理を再開する

「さてあいつらの分を合わせて8人分か、米は足りるだろうか・・・」

先日クラリッサから借りた日本の料理漫画をもとに料理を進める灯夜だった

「あ、いた!ネーナ!ファルケ!マチルダ!イヨ!灯夜がご飯作ってくれるんだって~!一緒に食べない?」

それぞれ名前を呼ばれた少女たちは各々がしていた作業を一旦中止してロニエからの誘いを受けた

「ロニエ！灯夜が飯を作るってのはほんとかい!?」
「あぁうん、今日は卵丼だって張り切ってたよ？」
「そうか！ちょうどアタシは腹が減ってたんだ、あいつの飯で腹いっぱいにさせてもらおう！」
　そう言って豪快な口調で赤毛の少女のファルケは猛ダッシュで食堂へと向かった
「すまないなロニエ、あいつはいつもあんなで」
　そう言ってロニエに謝罪をするのは紫髪の少女、イヨだ
「ううん、私もあんな感じだから大丈夫だよ、それより早くいかないとファルケがまた灯夜に調理場を荒らすな～って怒られるよ？」
「おっとそうだった、ではまたあとで」
「もう・・・ファルケったら、元気がいいのは結構だけれど食器を割るのだけは勘弁してほしいわねぇ・・・ねぇネーナ？」
「同感、ファルケはもっと自粛するべき、早急にね」
　そう言って大きな胸に手を置くのは黒ウサギ隊で一番発育が良い金髪の少女のマチルダと、茶髪のロングヘアーで見るからにおとなしそうなネーナだ
「二人とも、あんまりファルケをいじめちゃだめだよ？」
「わかってるわよぉ・・・さて、灯夜くんのご飯も久々だし早めに行って手伝えることは手伝っちゃおうか」
「うん、私もそう思ってた早く向かおう」
　二人はゆっくりとした足取りで食堂へ向かった、相変わらずどこかつかみどころのない二人だとロニエは安心する
「あとはクラリッサさんと隊長だね～っとクラリッサさん発見！」
　ロニエがクラリッサに声をかけるとぼーっとしていたのか少し肩を震わせた
　そんなクラリッサの様子に少し違和感を感じながらも食事会のことを告げてラウラを探しに行ったロニエだった
「そろそろ集まるころだな・・・あっおいファルケ！ちゃんと先にテーブルを拭いてから食器を置け！」

「るっせえなわかってるよ！」
「お前この前もそれで腹壊してたじゃないか！」
「あらぁ・・・灯夜くん怖い顔、でもかっこいいわねぇ」
「マチルダさん!?座ってないで料理運ぶの手伝ってくれませんか!?」
「私は拒否するわ」
「ネーナ・・・まぁいい」
「灯夜、君は少し休んだほうが良いよ？私が変わろうか？」
「イヨ、心遣いはありがたいがお前それでこの前の料理が炭になったの忘れたのか？」
　灯夜は料理より黒ウサギ隊四天王を相手することのほうに気力を使い、やっぱりこいつらを呼ぶんじゃなかったと後悔するもこの騒がしい空間は居心地の悪いものではないと自覚する、それどころかどこか心地よいとさえ感じていた
「(この感じ・・・孤児院を思い出すな)」
　灯夜が感慨に浸っているとロニエが隊長たちを連れて戻ってきた
「おかえりロニエお前たちの分も分けてあるから持って行ってくれ」
　灯夜がそう言うと今来た三人は料理を取り、それぞれの席に座る
「えーそれじゃあ蓋を開けてください」
　蓋を開けるとそこには鶏卵が丸ごと一つ入っており、しかもそれには揚げ衣が付いている
　中を割ってみると半熟状態の黄身がそのままご飯と絡みつき、芳醇なタレの香りと共に視覚と嗅覚から舌を喜ばせる
「今日のメニューは鶏卵の天ぷら丼だ、前にクラリッサから借りた日本の漫画に出てきた料理を再現して作ってみた、味見はしてあるから安心してほしい」
「なぁ早く食おうぜ！腹減って仕方ねぇよ！」
「ファルケ、そう焦るな」
「はいはいわかったよそれじゃあ手を合わせて」
『いただきます!!』

久々の食事会が終わった後、皿洗いを他のメンバーがすると進言してくれたので久々にラウラと話そうと探し始めた灯夜だったがラウラはどこにもいなかった
「あいつ・・・どこにいるんだ？」
灯夜が歩いていると千冬とすれ違った、いつものスーツ姿ではなくオフの恰好の千冬はあまり人に見られたくないのか少し歩くペースが速かった
「姐さん」
「あぁ柊か、どうしたんだ？」
「隊長はどこか知らないか？」
「ラウラか？ラウラならさっき海岸で見たぞ？」
「ありがとう、姐さん」
「あぁ、それとな柊」
「ん？」
「ラウラを頼んだぞ」
千冬から言われた言葉の意味をよく理解できなかった灯夜だったが任せろ、とだけ言って海岸へと向かった

「私は・・・」
基地のすぐそばの海岸、ちょうど灯夜を助けた場所であるそこにラウラは茫然と立ち尽くしていた
ラウラはここ最近ずっと自分の存在価値について考え、苦悩していた
「兵器や道具のように使われるのが・・・私の人生か・・・!?そんなのは嫌だ!!なら私は何を望む？何が欲しい？私は何になりたいんだ？」
ラウラは波打ち際で一人苦悩する、それが誰に届いているかも知らずに、誰に届かせたいのかもわからずに
「もう嫌だ・・・全部、投げ出そう・・・」
そう言ってラウラはもう冷たい海の中へどんどん入っていく、自分の足が届かなくなる深さまで、自分が溺れ死ぬ深さまで行くために
そして大きな引き波が来たとき、ラウラの足はとうとう砂から離れ

ただ水中を漂うだけになった
苦しい、冷たい、息ができない、泳げない・・・・・・怖い
助けて・・・だれ、か・・・
そして全身が冷たくなるのを感じた時だった
「何をッ！やってるんだよお前はッ!?」
救いの手が、現れた

時系列は少し戻って、灯夜は千冬の情報を頼りに海岸へ足を運んでいた
しかし遠くまで行っているのかなかなかラウラの姿は見えなかった
もしかしたらと、一か月も前の記憶を頼りに自分が引き上げられた場所までやってきたがやはりラウラの姿は見えなかった
もうすぐ冬だ、まだ本格的な寒さは来ていないがそれでも夜中は冷える、きっとラウラは基地の中に戻ったんだと自分に言い聞かせて戻ろうとした時だった
海と砂浜の中間あたり、そこで不自然な動きをする物体を灯夜は目視した、周りが暗いこともあって見間違いだろうとまた戻ろうとしたがどうしても気になって膝が海につかるあたりまで海へと入って自分が確認した物体をみた
すると灯夜は一瞬で海へ入り、決して穏やかではない波に抗いながら進んだ
さっき灯夜が見た物体の正体はラウラだったのだ、なぜかはわからないが海に沈みかけているラウラはおそらくあと数秒で意識がなくなる、その前に救出しなくてはラウラが死ぬ
そのワードが頭の中に浮かぶと灯夜の腕には不思議と力がこもっていた
そして底へ沈む寸前のラウラを何とか引き上げて砂浜まで運ぶ
「何をッ！やってるんだよお前はッ!?」
ラウラを砂浜まで引き上げてクラリッサへ連絡する、どうやらすぐに来てくれるらしい

「私、は・・・」
「お目覚めか？なんであんなとこにいたんだ？」
「私は死のうと思ったのだ・・・自分の存在理由も価値も、何になりたいのかもわからない、自分が何者かすらわからない、そんな私は生きている価値なんて・・・」
　灯夜は初めてラウラの胸の内を聞いた、まだ幼い体で一部隊の隊長を任せられて、いろいろと堪えていたのだろう、それに加えてこの間の灯夜の発言だ
　しかし灯夜は申し訳なさなど微塵もなかった、それどころかラウラに対して怒りが少しづつ湧き上がってくるのを感じた
「・・・けんなよ」
「・・・？」
「ふざけんなよ!!」
　ラウラは灯夜の突然の怒号に体を震わせた
「自分の存在価値がわからない!?ふざけんな！そんなもの俺だってわからない！存在価値なんて後から付くものだ！今のお前がどうこう言っても仕方ないんだよ！それに自分が何者かわからないだと!?お前は、ラウラ・ボーデヴィッヒだろうが！織斑千冬でもないお前自身だろうが！お前はいつも不愛想だけど隊員思いで、あこがれの人に追いつこうと必死に藻掻いて！部隊をまとめ上げるリーダーだろうが！立派な奴じゃないか！そんな自分に価値がないだと!?お前にはお前に価値をつけてくれる仲間が、家族がいるじゃないか！」
「ッ!?」
　その言葉にラウラは絶句した、今まで自分をこうも真剣に見てくれる人がいただろうか、あの千冬でさえ教官と兵士という立場もあってか自分にここまで深く接してはくれなかっただろう、それに最後の言葉、そうだ、灯夜は一度失っているのだ、大切な自分の存在価値を、居場所を、家族を
「私はッ・・・！愚か者だ・・・！こんなことで何がッ誇り高いドイツ軍だッ・・・情けない、情けない」
「そうだ、お前はバカだ、死ぬのを怖がるくらいだからな」

ラウラは砂浜に寝たまま泣きじゃくった、そこにいるのはただ一人の少女だった
その後ラウラは医務室に運ばれ、数週間は安静となった

深夜テンションで書いたので支離滅裂で意味不明な部分があるかもしれませんが
暖かい目で見ていただけると幸いです
ちなみにシオンが選んだ服はＦＧＯの英霊旅装マーリンの服を想像していただけたらなと思います

帰還と変化

ラウラが医務室に運ばれ数週間、灯夜を含め黒ウサギ隊のメンバーは千冬特製の地獄メニューをこなしながらラウラの帰りを待っていた

そして今日

「みんな、心配をかけた・・・ドイツ軍ＩＳ配備特殊部隊シュバルツェ・ハーゼ隊長ラウラ・ボーデヴィッヒ、ただいま帰還した！」

『お帰りなさい！隊長！』

ロビーにはシュバルツェ・ハーゼのメンバーがすべて集まり、ラウラの帰還を祝った

「さぁ！復帰してすぐではあるが訓練まで時間がないぞ！」

『はい!!』

久々の隊長の号令を聞き、気が引き締まる黒ウサギ隊のメンバーだったがラウラは灯夜がいないことが少し違和感だった

「ところで、灯夜はどこだ？」

「あぁ、灯夜はいま彼用のラファールが届いたのでテストをしています」

それを聞いた時ラウラはどこか安心し、そうか、と言った

一方そのころ灯夜は

「よし、あとは展開だけだな、柊！」

「はい」

灯夜は千冬に呼ばれると、運ばれてきた訓練機、ラファールに触れた

すると初めての時と同じようにラファールの情報が滝のように頭の中に流れ込んでくる、しかし不快感は全くない

そんな説明できない仕様に驚きながらも灯夜は二度目のＩＳを展開した

「ほう・・・」

隣で千冬が感心したような声を上げた
「存外に似合っているぞ柊」
「それは褒めているのか？まぁいいが」
灯夜は珍しくも千冬に褒められ少しこそばゆい気持ちだが、悪い気はしなかった
「さぁ運用テストを始めるぞ、まずは飛行からだ、基礎学は私含め隊員たちから教えてもらっているから説明は不要だろう？」
「当たり前だ」
黒ウサギ隊のメンバーに教えてもらった基礎をしっかりと頭の中で復習しながら少しづつ地面から足を浮かせていく
「よし、そのままゆっくり飛行してみろ、まずは一分だ」
千冬の許可が下り、灯夜はゆっくりとまるで鳥のように地面から飛び立った
「おぉ、これは・・・良いな」
灯夜の体が風を切り、冬前の少し寒くも心地が良い風が灯夜の体を撫でる
隣で悠々自適に飛ぶ鳥にあいさつをし、改めて自分がいま飛んでいるのだと実感する
かつて自分が夢見た空を自分が飛んでいるのだと考えるととても心地が良い
『柊、そろそろ一分だ、降りてこい』
いきなり耳元で千冬の声がし、少し驚く灯夜だったが指示通りゆっくりと速度を落とし、地上へ帰還する
「空を感じた感想を聞いても？」
「あぁ、これは良いものだな、まるで鳥になった気分だ、もし戦争がない世界だったらこれに乗って宇宙にでも行きたいものだな」
宇宙、という言葉に少し眉を震わせた千冬だったが、灯夜にはその意味はわからなかった
「宇宙か・・・そうだな、行けると・・・良いな」
千冬のその背中が、やけに悲しそうに見えた灯夜だった
「姐さん・・・？」

「いや、何でもない、さて、次は武装のチェックだ、忙しいぞ？」
　その後もテストは続き、終わるころにはもう日が沈んでいた
「はぁ・・・どれだけテストすれば気が済むんだ、全く」
「まぁお前は人類初の男性ＩＳ操縦者だからな、いろいろ勝手が違うのだよ、苦労をかけるが頼む」
　千冬ははにかみながら灯夜に言った、その顔がなんだか本当の姉に言われているようで気恥ずかしかった
　テストを終えてしばらく灯夜は自室で次に合わせるコーヒー豆のブレンドを考えながらゆったりと過ごしていた、すると扉からコンコンとノックの音が聞こえてくる
「灯夜、私だ、話したいことがあるから入っても良いか？」
「ラウラか？あぁ、良いぞ」
　声の主はラウラだったが、今までの低めの声ではなく、一般的な女性の少し高めの声だったため、少し違和感があった
「入るぞ」
　ラウラはいつもどおり軍服姿だったが、どこかいつもとは違う心に余裕を持ったかのような雰囲気を纏っていた
「要件は？」
「まずはＩＳ初稼働おめでとう、これからも我が隊員として奮闘してほしい、それとありがとう、私は自分を見失っていたが君のおかげで自分自身を見つけることができたよ、やはり私は私だ、価値はこれからつけていく、教官になろうとするのではなくあの人に習い、学び、あの人を超えようと思う。だから見ていてほしい」
　ラウラの顔には以前のような暗く鉛のような影はなく、どこか晴れやかな表情だった。
「そうか、俺も一人の隊員として奮闘することを誓おう、だからこれからもよろしく頼む」
「これから、これからか・・・ふふふ」
　ラウラはどこか不敵な笑みを浮かべながら静かに笑っていたが、灯夜には何故ラウラが笑っているのかわからなかった
「何故笑っているんだ？」

「ん？いやいいんだ、何でもない」
　そのころ扉の前では・・・
「（副隊長!!これはフラグが立ったというやつでは・・・!?）」
「（まだ早まるな！このフラグは後々新しいヒロインに主人公を攫われるタイプのフラグだ・・・！だからまだ副隊長のとの百合エンドはあるハズ・・・！）」
　そんな会話を聞きながら血涙を流す副隊長がいたことを灯夜とラウラの二人はまだ知らない

　亡国機業ｓｉｄｅ
「スコール様！」
「何？騒がしいわね」
　月明かりの下、医師に包帯を取ってもらいながらスコールは部下からの報告を聞く、その姿は数週間前のボロボロの状態からは打って変わって傷ひとつない完璧な姿であり、けがをしていたという事実さえも感じさせない
「実験体の足がかりが掴めました」
「それは本当!?いったいどこに!?」
　スコールは目を見開いて渡された資料に目を通した
「我が調査員の報告によるとドイツのある部隊基地に国名義でラファールが一機配備されたようです、しかも通常の機体とは違い性能がブーストされているようです」
「ドイツね、また厄介な場所に・・・でも必ず取り戻してあげるわ・・・私の灯夜」
　スコールは目の前に研究員がいるにもかかわらず身をよじらせ発情しだした、気まずくなったのか研究員はそそくさとその場を後にした
「さて・・・行きましょうか、私の灯夜を取り戻しに、亡国機業（ファントムタスク）の総力をもって攻め込みましょう」
　その部屋にはスコールの不敵な笑みが響いていた

閑話休題〈1〉

クラリッサのルーティーン

私はドイツ軍所属ＩＳ特殊配備部隊、シュヴァルツェ・ハーゼ副隊長のクラリッサ

私はここでＩＳを使い自国を守るために生み出された試験管ベビーだ

人為的に生み出された私は当時生きるという希望が持てなかった、しかし、私の元に１人の天使が舞い降りた。

透き通るような白い肌、それを助長するかのように美しい銀の髪はどこか気品を思わせる

その紅い双眸はキリッとしていて見つめるもの全てを殺してしまいかねないような目つきは気高さすら感じられる

その瞳に見つめられて私は思った

この人物こそ私の仕えるべき相手だと

それからというもの私は彼女ことシュヴァルツェ・ハーゼの隊長であるラウラ・ボーデビッヒと共に訓練に明け暮れる日々、傍から見ればなんの楽しみもないような日常だがそんなことは無い。

なぜならーー

「今日の就寝時間は２０時４８分５６秒、健康状態に以上なし、と」

その日私はいつものように隊長の就寝時間を日記帳に記録し終えると屋根裏を伝い隊長の部屋から自室へ戻る

自室の天井まで着くとなるべく音を立てないようにそっと降りる。

そして日記帳を誰にもバレることがないように隠し場所に隠す

ここまでが私のルーティーンだ、このルーティーンは隊長が配属されたその日から続いている。

おかげさまでノートの数は１００冊以上になっていて最近収納場所に困っている、さながら思春期真っただ中の男子のようだ

そんなことを考えながら机の中に保存してある日付が書かれた小瓶を取り出す。

よく見るとその中にはラウラのものと思われる美しい銀色の髪の

毛が何本も入っている
「スーハー・・・スーハー・・・やっぱり隊長の髪の毛の匂いは何事にも変えられない素晴らしいモノだなぁ・・」
呼吸を荒らげながら身悶えし、香りを脳へ焼き付ける、その光景はさながら自慰のようで部屋には熱く、甘い熱気が籠るのだった

終

第一次耳かき戦争ｉｎドイツ
この世には耳かきというものが存在する。
それは簡潔に述べてしまえば耳の垢を掃除するというものだ
ほとんどの場合自身で処理したり、幼少期などでは母親にやってもらったりもするがそれもほんの一時期である
しかし中では恋人にしてもらうというシュチュエーションもあるらしい
さてそんな耳かきにおいて絶賛悩んでいる少年が1人・・・
「私がすると言っているだろう!!」
「いいえ、ここだけは譲れません、教官」
日も沈みかけの夕方、そう叫びあっているのはラウラと千冬だった、灯夜の部屋の外にはなんだなんだと人だかりができており、軽いパニック状態である
なぜこうなったのか、それは今朝に遡る・・・
朝の朝礼、それは軍にとっては寝起き一発目の戦場である
朝といえども気は抜けず、時間は厳守。挨拶の声が出ていなければ全員その場で筋トレの始まりだ。
灯夜は朝が少し弱く、しかも真冬のため布団から這い出すのも一苦労である
灯夜自身筋トレが苦というわけではないのだが居候という身では周りの人達に苦を味合わせたくは無いのだろう
そのほどに灯夜は今の環境を愛していた
「それでは今日の訓練内容を確認する!!まずはー」
朝礼が終わり、灯夜達は食堂で朝食をとる。

部屋から持参したオリジナルブレンドのコーヒーを飲みながらゆったりとした時間を過ごす。
現在座っているのはラウラの特等席、そこにいつもとは違う椅子がひとつありそこに腰かけていた。
ここに座っているのは先日ラウラから直々に許しを得たからでその際
「灯夜にはそばにいて欲しい」
と言われたものの特に意味を理解していない灯夜はいい席が取れたと喜ぶだけであった
そも灯夜には元から親しい女友達などおらず、泣き虫だった灯夜に着いてきてくれたのは優斗くらいであったのだ
だから灯夜にはそれが好意であることなどは全く見当もついていないのであった
ほんの少しコーヒーの香りに身を委ねていると耳を誰かにつつかれる。
少し冷たさを含んでいるそれは、冷たいトレイを長らく持っていたからなのであろう
「待たせたな、しかし灯夜・・・いい香りだな」
「あぁ・・・ココ最近の中では1番の出来だ、しかし難点があってな、すこぶる苦い。ブラック派の俺ではあるが、これにはミルクを入れざるをえん」
ラウラは少し笑いながら席に座ると手持ちのサンドイッチを食べ始めた。
その姿はいつも前線で見る厳しいモノではなくどこか小動物めいた愛らしさがあった
ここ最近ラウラは以前のように張りつめた表情はしておらず以前とは違った落ち着きで部隊をまとめている
分をわきまえずそんなことを考えているとふとラウラの手が灯夜の右耳を撫でた。
「なっ!?どうしたんだ!?ラウラ!?」
「あぁ、いやすまない耳にゴミが着いていたものでな取ろうとしたん

だが・・・」
「なんだそういうことか、脅かさないでくれ」
灯夜は少しほっとするとそういえば自分が何ヶ月も耳掃除をしていないことを思い出した
「そろそろ耳掃除しないとな・・・」
ここに綿棒や耳かき棒はあっただろうか？なければ買いに行かなくてなはな・・・
そんなことを考えているとラウラから声がかかった
「灯夜、もし嫌でなければ私がその・・・ 耳かきしてやろうか？」
ラウラは恥ずかしいのか少し身をよじらせながら頬を赤くして灯夜に言った
その申し出は耳かきにあまり自信がない灯夜にとっては朗報以外の何でもなかった
もし自分でやって鼓膜に傷をつけでもしたら今後が大変だ
「そうだな・・・ 今後のためにも頼んでいいだろうか」
「今後・・・ ふふっ、そうだな今後のためだ、では訓練が終わったら私の部屋に来てくれ」
ラウラは灯夜に約束を取り付けるとそそくさとその場を去った
余談だが、ラウラはその後訓練までの短い時間で部屋の掃除を全て済ませたのだそうだ
その日の訓練が終わり、灯夜は自室でシャワーを済ませてラウラの部屋に向かった
部屋までの廊下を歩いていると見慣れた顔が前の角から顔を出した
凛とした顔立ちに確かに人間としての強さが見える女性、千冬だ
「ん？どうしたんだ柊、お前がこの時間になんて珍しいじゃないか、どこかに行くのか？」
普段灯夜はこの時間コーヒーのブレンドを考えたり訓練後のストレッチをしたりしているため基本的に部屋からは出ない。
しかし今日はラウラの部屋に向かうため部屋から出ている、それを珍しく思ったのか千冬は少し驚いた顔で灯夜を見ていた

「あぁ姐さん、今ちょうどラウラの部屋に行くところなんだ」
「ほう？ここ最近随分と仲がいいじゃないか、少し前とはまるで違うな」
「いやまぁ、それほどでもないぞ？今も耳かきをしてもらいに行くだけだしな」
それを聞くと千冬の顔には驚愕が走った
ただでさえ気難しく隊長としての厳格を保つラウラがここ最近、物腰が落ち着いてきたように思えた。
その原因が灯夜だということも重々承知していたがここまで２人の関係性が進んでいるとは想像だにしていなかったのだ
「・・・　めだ」
「ん？何か言ったか姐さん？」
「ダメだ!!」
急な千冬の大声に虚をつかれた灯夜だったが、何故千冬がいきなり大声を上げたのかが分からない
「とにかく!!基地内でふ・・・　不純性異性交遊なんてダメだ!!私も同行する」
「同行するって・・・・　耳かきしてもらうだけじゃないか姐さん!?」
結局そのまま千冬と共にラウラの部屋へ向かった

「そろそろ来る頃か・・・部屋の片付けも終わったし、掃除もした、準備は万端だな」
ラウラは自室で自分の部屋の出来具合に感心する
彼女にとって意識している異性が訪ねてくるのだから緊張するのも当然ながらあわよくばあんなことやこんなことをしてしまったらどうしようなどという年頃の女の子にふさわしい妄想を頭の中で繰り返す
コンコン
そんな地味にトリップしかけているラウラを余所に心地の良いノック音が二回、部屋に響き渡る
緊張で胸が張り裂けそうになりながらも嬉しさや期待で頭が爆発

寸前だったラウラは特に何も考えずに勢いよく扉を開ける
「随分楽しそうじゃないか？えぇ？お前がそんな顔をするなんて思わなかったぞラウラ」
そこには・・・鬼神（千冬）がいた
そしてシーンは冒頭に戻る
灯夜の目の前では絶賛議論が行われているものの、いつ終わるのかまるで見当がつかない、何をそれほどまでにやっけになって言い争っているのか灯夜にとっては甚だ疑問でしかなかった
「二人とも、一旦落ち着いてくれないか？」
「灯夜は少し黙っていてくれ、これは教官と私の問題だ」
「柊、少し黙れ」
どうやら灯夜には止める手段がないらしい、というか千冬のほうは圧かけすぎてすごい怖い
「（仕方ない、俺もされたことはないがこの手しかないか）」
今だ舌戦を繰り広げる二人の前に再び灯夜は言葉をはさむ
「二人とも、俺にいい考えがあるんだ、どうせ耳は二つあるのだから両方してもいいんじゃないか？」
「なっ!?」
「ふむ、確かにそのほうが合理的だが、良いのか灯夜？」
「あぁ、別段俺は耳かきされる側だ、何も言えんよ、それにいつもは仲のいい二人が口論しているのは・・・少し心が痛む」
その言葉に二人ははっとした、自分たちは今まで何をしていたのだろうかと、柊灯夜という男を喜ばせるためにしようとしていたのに自分たちはなんて醜い争いを続けていたのだろうかと
そんなこんなで灯夜の提案を快諾した二人は部屋に用意されていた綿棒を持って灯夜の耳に対峙する
耳かきと言えば膝枕とセットというイメージがあるが今回は耳かきをするのが二人のため灯夜が壁にもたれかかる形で開始された
「じゃあ入れていくぞ」
二人の心地よいささやき声とともに綿棒が耳の中へと侵入していく

ぞりぞり、ぞりぞりと耳垢がこそぎ取られていく、なかなかに久しぶりな耳かきに少し声が漏れてしまう灯夜だったが二人はどうやら相当集中しているようでからかわれることはなかった
「ど、どうだ灯夜？私も他人の耳掃除をするのは初めてだからな、少し痛いかもしれないが痛かったらすぐに言ってくれ」
「それにしても随分耳垢が溜まってるじゃないか、定期的に掃除しないと聞こえが悪くなってしまうぞ？」
両者ともに集中し、しかも顔を耳に近づけているせいでなかなかに吐息がかかって耳がムズムズする、というより心地いい
時計の音が鮮明に聞こえるほど静謐な部屋の中のため灯夜の耳には二人の吐息が直にかかり、僅かな呼吸音でも部屋中に響いてしまう
「耳かきというのはこんなに心地いいものだっただろうか？」
不意に灯夜の口からそんな言葉が漏れた、その言葉をラウラは聞き逃さなかった
「心地いい？それは本当か!?倉庫に放置してあった射撃訓練用のマネキンを使って練習した甲斐があったというものだな・・・」
「ラウラ・・・最近マネキンの数が減ってきていると思ったらお前だったのか・・・全く、あとで戻しておくんだぞ？」
二人がそんな会話を弾ませる、そんなとき灯夜はあまりの心地よさに睡魔に襲われていた
「(ダメだ眠気が・・・二人がせっかく俺のために耳かきしてくれているというのに・・・)」
結局灯夜は睡魔に抗えず深い眠りについてしまった
「教官、灯夜が眠ってしまったようです」
「まぁこの状況では眠るなというほうが難しいからな、最近こいつは休んでいなかったようだし丁度いいだろう、私はこの後自室に戻るがお前はどうする？」
「私はこのまま灯夜と一緒にいることにします、以前クラリッサから教えてもらった朝チュンなるものも試してみたいので」
「クラリッサめ・・・またラウラに余計なことを教えよってからに・・・」
千冬はやれやれといった表情でそのまま自室を出て行ってしまっ

た

ラウラはそのまま灯夜の頭を自分の太ももに乗せてしばらく彼の顔を見つめていた

「あぁ、見れば見るほど顔が良いなこいつは・・・今は私の、私だけの灯夜だ」

ラウラは膝枕をしたまま灯夜の頭をなでる、綺麗で艶のある白髪(はくはつ)とは対照的に顔をよく見ると手術痕のようなものが多数見つかる、彼がここにたどり着くまでに一体どれだけの苦痛を味わったのかはラウラは知る由もないがただ一つ言えるのは・・・

「灯夜を傷つけるモノは絶対に許さない、私だけの、愛おしい人を傷つける奴らは一人残らず・・・殺してやる」

その決意だけは固かった

お久しぶりです

さて閑話というわけで入れさせていただきましたこの話ですが、今後の展開がなかなか決まらず四苦八苦しております（泣）

一応ここから展開を広げていければなと思っておりますのでよろしくお願いいたします

追記

作者は耳かき棒より綿棒のほうが好みです

躍動

暗い場所、暗く、ただ暗い
そんな場所で光が熱と共にじんわりと体を包み込む
「またここか」
やはりというか灯夜はまたこの場所に来ていた
もはやあの孤児院から悲鳴は聞こえず、感覚もおぼろげになっている
これは灯夜自身がこの出来事を忘れかけているという証拠なのかもしれない
「忘れてたまるものか、たとえ感情が轟絶鬼に置き換わろうとも、絶対にな」
そんな決意を言葉にしていると、ふと久しい雰囲気を感じる
『久しいな、灯夜よ』
「あぁ久しぶりだな轟絶鬼（とどろき）」
振り向くとあの少女、灯夜に埋め込まれたＩＳコアの人格である轟絶鬼だ
少女は金髪の髪をなびかせてこちらに近づいてくる
『随分と幸福の余韻に浸っているようだがよいのか？貴様の目的はその体をもって死ぬことであろうに、他者とのつながりなんぞは正直邪魔であろう？』
轟絶鬼は耳元でそう囁く、その言葉は耳にすんなりと入ってきて灯夜の心にストンと落ちる
実際灯夜の心そのもののような轟絶鬼の言葉は他の誰よりも心に入り込むのだが
「轟絶鬼は優しいんだな、心配してくれてありがとう」
灯夜がそう言うと轟絶鬼は少し顔を赤くしてそっぽを向いてしまった
『ふんだ、我（オレ）は心配などしておらん、ただ宿主たる貴様の動向が気になっただけだ』
そんな轟絶鬼に少し可愛いと思っていると辺りが少し明るみ始め

る
『そろそろ目覚めの時か、我が主よ、ゆめゆめ忘れるな、貴様の目的と守るべきもの、その区分をな、ではよい目覚めを』
「わかってる、目的は死ぬこと、守るべきものは・・・もうない」
灯夜がそう吐き捨てる先はこの孤児院だ
そのまま灯夜は今だ燃え盛る孤児院の記憶から意識が浮いていくのを感じた
「はぁ、轟絶鬼のやつ、久々に顔を見せたと思えば・・・」
夢の中での素直じゃない轟絶鬼の態度を思い出しながらゆっくりと体を起こそうとすると異変を感じる
「ん?何かいるのか?」
灯夜は布団から起き上がれない、実際には足が動かないだけなのだが、動かないというよりは何かにがっちりとホールドされているような感覚だった
時期的には冬の終わりごろであるため長ズボンの寝間着で寝ている灯夜だが、それでも伝わってくるこの柔らかな感覚は・・・
「・・・んぅ、あ、灯夜、おはよぅ」
「いや可愛いなラウラ」
「はぅ!?可愛い?私が!?」
あまりにも可愛すぎて思いがけずに口走ってしまったが、実際に(何故かベッドにいる)寝起きのラウラは可愛かった
いつも艶やかな髪は寝ぐせが付きまくっていてぼさぼさで、目は眠たげでトロンとしている
そして極めつけはその服装だ、少しはだけていて、肩が出ている、そこから覗く鎖骨はとてもセクシーだった
まだ年齢の浅い灯夜だったが、いつもは大人っぽくクールな彼も、このかわいらしさの塊のような少女を前に年相応のリアクションしか出なかった
「わ、私が可愛い・・・?私は、私はぁぁ・・・あぁぁぁぁ!!」
ラウラは恥ずかしさのあまりかものすごいスピードで部屋を飛び出して走り去ってしまった

「何だったんだ一体・・・というかなんで俺のベッドにいたんだラウラは」
謎が残るが、ともかく灯夜はそのままシャワーを浴びて朝のトレーニングをこなすのだった

「ふぅ・・・やっと到着しました、こちらは随分と気温が高いのですね・・・」
『前いた海域とは真逆だからね～ちょっとクーちゃんには暑かったかな？でも安心して!!こんなこともあろうかとクーちゃんの服には温度調節ナノマシンが組み込んであるのだ!!ブイブイ!!』
少し過保護な束との通信を聞きながら、少女、クロエ・クロニクルは忌まわしきドイツの地へと降り立った
「私を生んだ国、私を廃棄した国・・・でも、人々に罪はない」
クロエはそんなことを口ずさんでいる、これは束から教わったことだった、束がそんな考えを持つようになったのは灯夜との一件がキッカケであり、その話を聞いてクロエも灯夜に興味が湧いていたのだった
『正直、クーちゃんをドイツに行かせるのは私も迷ったんだけど、私が出向くわけにもいかないから、ごめんね』
「大丈夫です、束様、私もとーくん様とお会いしてみたかったですし、それに、向き合わないわけにはいきませんから」
『クーちゃんは強いね・・・でもそろそろ私をママって呼んでくれてもいいんだよ？』
少し茶化す束をよそにクロエは灯夜のいる海岸の軍事基地を目指すのだった

同刻、ドイツ海岸付近
最新鋭のステルス機能を備えた航空母艦、その中にはまるで王室のような豪華な作りの部屋が一つ
その中に鎮座するのは彼女、亡国機業のリーダーであるスコールだ

彼女はモニターに映る灯夜がいるであろうシュバルツェ・ハーゼの基地が映し出されていて、それを見ながら酒をあおる
「そろそろドイツね、やっと灯夜くんに会えるのね・・・楽しみだわぁ、あの子を捕まえてどうしてやろうかしら、いたぶって楽しむのも良いわねぇ、逆に優しくして後でまた・・・フフフ」
妖艶にそうつぶやく彼女にはもう灯夜しか見えておらず周りなんてどうでもいいといった風であった
それは仲間も同様であった
「スコール」
それをみてオータムはどこか虚ろ気な表情になる
まるで大好きだった壊れたおもちゃをずっと見ている子供のような、そんな表情
「(灯夜、お前がスコールをこんな風にするのか・・・!!お前が・・・!!)」
想い人が狂乱の渦へ入っていくのをただ見ることしかできない彼女は胸の内の憤りを渦中の少年にぶつけようとした
だがしかし忘れてはいけない、彼もまた被害者だということを
自分たちに連れされられ、スコールの快楽の捌け口として拷問され、挙句には肉体を改造され、記憶まで奪われるところだったではないか
亡国機業に来る前の灯夜は優しい少年だったという、それは彼を調べていく上でさんざん思い知らされた
あんな綺麗な目で海を見ていた少年が、自分たちから去る時にはあのような絶望しきった、この世の中すべてを憎むような目をオータムへ向けていた
それは憤怒だろうかはたまた祈りだったのだろうか、今では知る由もない
「そうか、おかしいのはスコール自身なんだ・・・元から灯夜は関係ないんだよな、狂ってたのはスコールと、アタシなんだ、ケジメ、つけなきゃな・・・」
そういうとオータムは決意を固めたような目で部屋を後にした

決戦は、近い

「全く灯夜の奴は、何度隊長を誑かせば気が済むのだ、今日なんて私のベッドに飛び込んできて・・・うへへへ」

そう言い、今朝の一件を思い出して鼻血を流すクラリッサ

今朝の一件というのは、他でもないラウラが灯夜に可愛いと言われて基地内を走り回り、最終的には副隊長であるクラリッサのベッドで泣きじゃくったという事件である

クラリッサはその後、涙目のラウラから鼻血を垂らしながら話を聞き、狂喜するラウラを見た隊員たちに、隊長の威厳を保つため灯夜がラウラを誑かしたというあたりさわりのないデマを流して、隊長の体裁を保った

「しかしあの時の隊長可愛かったなぁ・・・涙目で、うるうるしてて、なんだか小動物みたいで・・・普段の隊長も好きだけど、あんな感じの隊長も好きだなぁ、これが日本の漫画で見たギャップ萌えというやつだろうなぁ」

にやけ顔で今朝のラウラの顔を思い出す、余談だがその時のクラリッサの顔を見た隊員たちによるとその顔はとてもだらしなくって、気持ち悪かったそうな

そんなこんなで灯夜の部屋に着く、コンコンと、ノックをするが返事はない

「灯夜、クラリッサだ、入るぞ」

まだこの部屋にいるはずと思っていた灯夜は部屋にはいない、とっくに朝の自主トレは終わっている時間のハズだ、キッチンには挽かけのコーヒー豆とブクブクと泡を立てて沸騰しているやかんが捨て置かれている

おかしい

クラリッサは直感的にそう思った、さっきまで呆けていた思考が一気に加速する、灯夜はトイレだろうか?それにしては人の気配がないそして部屋を見回すとテーブルに書置きのようなものが置いてあった

嫌な予感がしてその書置きを見たクラリッサは一目散に長官と教官である千冬のいるであろう部屋へと向かった

書置きにはたった一言

世話になった

とだけ書かれていたのだった

めっちゃ久々です

楽しみにしてくれてた人がいたらありがとうございます

これからもちょびちょび投稿していく予定なのでよろしくお願いします

感想ください